

ふことは夢の中に詳しく書いてないが、スチーブンソンが實際にこの夢を見たものとする
と、彼は確にリアリスチックな場面を見たに相違ないと想像されます。この夢は簡単なも
のであるが、かういふ點から考へると、結婚前に於ける彼の頭腦を支配して居つた心理状
態は極めて明瞭になつて来るやうに思はれます。日中は彼の理性が彼の感情と思想を抑壓
し得たけれども、睡眠に入ると彼の感情と思想は自由を得て、自分の秘密を發いたものと
見ることが出来ます。

スチーブンソンのことは此處で打切つて、夢に關する西洋の名著を調べて見ます。まづ
第一に頭に浮んで来る書物は佛蘭西のゴチエーのリア・マルセラであります。この小
説の主人公はヲクタピラスといふ青年で、この青年が博物館で溶岩の一塊を見ました。そ
れはたゞの溶岩でなく、一婦人の胸の上で冷却されたもので溶岩の恰好で婦人の姿がはつ
きりと想像することが出来ました。もとよりこの婦人は溶岩をしたゞか帯びて死んだもの
であるといふことは知れて居るが、青年は一目この「溶岩の女」を見るや否や直ぐ戀愛をす
るに至りました。生きた人間と溶岩の女との戀、如何にも不思議な戀といふ外ありません。

これがどう發展して行くであらうか。青年は呪物崇拜者の一人にして、藝術で表現されて
居る古代の女に憧憬を持つて居る夢想者であつたことは勿論です。彼はポーの詩の言葉に
あるやうに「それは希臘の光榮とそれは羅馬の壯麗」とを眼前に眺めたいと思つた。彼は
頭の先から足の指先まで偶像禮拜者で「美」と「形」との賞賛者でありました。暮場で眠
つて居る羅馬の女の一本の毛髪を見ても、彼の全身は喜で震動するであらうし、マミーと
なつて横たはつて居る古代の女の脛を眺めて彼の血潮は感激で動くのを覚えました。博物
館で溶岩の女を見たといふその晩の夢に、彼はウエスピラスが噴火した遠い昔に持つて行
かれ、羅馬の劇場でプラタスの芝居を見物して居ると、溶岩のために一命を失なつて博物
館に保存されてゐた女が實際に顯はれ、彼の傍に寄添つて来て彼に戀をしました。芝居が
終つてから、彼は彼女の女奴隷に案内されて彼女の家へ行きました。彼女はマリア・マルセ
ラといふ羅馬で有名な遊女でありました。彼女の語る話によると、彼の熱烈な憧憬にほだ
されて溶岩の下から復活して来たものださうです。青年ヲクタピラスは彼女の熱い愛情を
喜んで受け彼女の體を接吻しました。然るに突然彼の面前に一人の基督教徒が顯はれたと

思ふや否や、妖術的雰圍氣はさつと吹拂はれて仕舞い、マリアは青年を捨てねばならないことになりましたが、それを肯じないので基督教徒は悪魔祓ひの呪文を唱へました。さうするとマリアは青年の手を放つに至つたと同時に、ヲクタピウスは夢から覺めました。氣絶して居りました。夢はこゝで終つて居るが、この青年の物語はまだ終つて居りません。彼のマリアに對する戀愛は決定的のもので、其後彼はある女に結婚することになつたが彼は夢中の女を忘れることが出来ず、妻に對する不實の夫とならざるを得ませんでした。

人も知つてゐるやうにゴチエーは愛と美の敵として基督教を眺め、東洋的偶像禮拜の厚ぼつたい孤立な感情の絞織の中に藝術を見出さうとし、又自分ではそれを見出したと信じ、異國情調の文學者でありました。前記の夢物語もすべてその他の夢のやうに、無意識の希望が夢の中で満たされたもので、青年ヲクタピウスは夢の中でペーガンの世界に住んでそれを現實と眺めたのです。彼が夢の中で接吻した女も彼に取つて現實的であれば、彼女の時代も彼に取つて實際的に羅馬時代であつたに相違ありません。

ヲクタピウスは誰でも無いゴチエー自身であつて、亡びた過去の世界に憧憬れ古い時代

の感情と想像から小説の主人公を作りあげ遊女の愛を藝術的に淨化したもので、ヲクタピウス同様に彼は偶像禮拜者であつたのです。夢の研究者はヲクタピウスが氣絶して目醒めた瞬間其物に深い興味を持つて、アンキザエーの瞬間であるといつて居ります。彼等は無理に感情が抑壓されて激烈な抵抗に出會ふと所謂アンキザエーの夢が起つて來ると論じてゐますが、私はこの文の目的からいふと何も其點に觸れる必要がないやうに思つて居ります。

このマリア・マルセラに比敵するであらうと思はれる物語を私はキプリングのゼ・ブラツシユウツド・ポイーと題する小説に發見します。この英語で書いた夢物語りも夢の研究者に對し興味のある材料を提供するであらうと思つて居ます。筋はジョウジといふ青年を取扱かつたもので、ゴチエーの青年と同様に感情が無意識に抑壓された結果でありませう様々な夢を見ます。その夢は一處女に關したもので、幼年時代にその小娘を一度見たことがあつてしばらく忘れて居つたものが、結末に實際と顯はれてジョウジと結婚するに至つて居ります。今この小説の筋を話しますと、ジョウジ即ちブラシユウツド・ポイー(藪

の中の少年は三歳の時に一人の巡査を夢見ました。六歳の時になると日と無く夜と無く夢に襲はれて、その夢はいつも海岸もよりの小藪で始まります。藪の中から一處女が顯はれてグリムのお伽噺の本に出て来るお姫様となります。ジョウジはこの處女をアニー・アン・ルイスと呼びました。七歳の時彼はフクスフオドへ出掛けた所が、アリス・イン・ウツトランドの挿繪におるやうな小さい娘に出會つて、巫山戯たりいちやついたりしました。ジョウジは青年となつて印度へ渡ることになり、印度で毎晩幼年時代に見た巡査の夢を見ます。この巡査は「私は日中といふ名の巡査で睡眠の都から歸つて来たものだ」といふ歌をうたひます。ある日ジョウジは夢の中で一つの蒸汽船に乗ると、水の上に、リリーの花が咲ひて浮いてゐるのを見、リリー・ロツクといふ所で古い昔に夢見たことのある小娘に出會つて、一緒に馬に乗つてサーチー・マイル・ロードを駆け廻りました。その後しばらく夢の中でこの小娘との密會を彼は喜んで居りました。所で彼は印度から故郷の英國へ歸り、自分の家の應接間で一人の女の客人がゐて「僕は日中といふ名の巡査」といふ歌をうたつてゐるのを見て、彼は其女がこの歌を作つたのであらうと想像しました。會つて見ると驚い

たことは、七歳の時フクスフオドで一度出會つて巫山戯たことのある小娘が成人したのであつて、ルシー嬢といふ名前の女でありました。ジョウジが彼女に夢の中でいつも會つて居つたといふことを語ると、彼女も同様に彼のことを夢見て居つて、リ、ー、ロツクといふ場所のことも又サーチー・マイル・ロードの乗廻りのことも知つて居りました。それから彼女は夢の中で彼を接吻したことがあると語ると、彼も同様に彼女を接吻したといひました。こゝまで話をすればこの物語の最後はどうなるか誰れも想像されませう。多く外國の物語が終るやうに、ジョウジとルシー嬢は目出度く結婚して話の最後の幕はするすと落ちるのであります。

この物語は何を意味するでありませうか。たゞ夢の中ではばかり知つて居る女をどうしてジョウジは愛するに至つたその経路は何でありませうか。夢の中でサーチー・マイル・ロードを馬で走るといふことに何か暗示があるでせうか。又巡査「日中」はどういふ譯で出て來るのでせうか。主人公のジョウジは晝の間は自分の愛人に出會ふことが出來ないのであつて見れば、正しく日中は彼に取つて敵であつたに相違ありません、即ち巡査、「日中」

は無意識に對する意識を代表し、幻想に對する現實を表現して居つたのです。やはりこの物語りもゴチエーの物語と等しく實際生活に於ける無意識の慾望が夢の中で満足せられたといふことを説明したものであります。ジョウジは幼少の時に女を見てその女を愛した、さうしてその女を一時忘れたが戀愛の柔い芽は彼の精神に宿つて居りました。再びその女を夢見るやうになつた時は戀愛の芽も大きくなつた時であります。さうしてその夢が實際の上に實現した時に、作者のキプリングは夢の世界と現實世界との境界線を破つ仕舞つて居ります。ジョウジの見た夢も靈夢とか正夢とか稱すべきもので、總ては現實を産み出す力を持つて居る神託ともいふことが出来ませう。彼も彼の相手の女も共に同様な夢を見たといふ點で、人生は不思議な運命で支配されてゐて夢がその運命を説明して居る、さうして夢が實現して現實と合同したのであります。キプリングが實際かういふ夢を見たものかどうかであるかは他人の知らない所であるが、ブラツシユウッド・ボーイは自分をモデルとして書いたものゝやうに思はれます。少くともこの物語で彼の夢に對する一般を知ることが出来るやうと思はれます。

日本の文學にはかういふ種類の作品は少いやうであるが、それでも漱石に夢十夜があることを私は深く喜ぶものであります。私は漱石を研究したものではありませんが、夢十夜を読みましても、他の彼の作品のやうに或はそれ以上に、漱石自身のポートレートを描き出すことが出来るやうに思はれます。實に夢十夜は現實味に富んだもので、云ひ變へると夢と現實世界が一となつて讀者の前に顯はれて居ります。作としては短いけれども、前記ゴチエーやキプリングの作と並べることが出来るかも知れません。然し夢に熱烈な戀愛が織り込まれてゐないので、人には深い印象を與へない點を残念にも思はれます。如何なる作家でもその人生の生活状態や實際談を詳しく知ると、その作品よりも明瞭に了解することが出来、又それと逆に作品からその作家がどんな人間であつたかを的確に想像することが出来ます。これは文學研究者に取つて興味のあることであります。もとより作家に依つて個性を作品にはつきり出して居る人もあれば、さうでない人もありますから一概にいつて退けることは出来ませんが、兎に角作品とその作家とは分離することが出来ない關係に立つて居ります。アラン・ポーの如きは、彼の傳記を讀んだと同様な印象を彼の詩から受ける

ことが出来るぢやありませんか。又ボール・ヴェレーヌにしてもポーと同様であると思はざるを得ません。このことは近代文學者の上に適用されるのみで無く、古代の詩人に對してもさうであります。今この一例として少しくホーマーのことを語りませう。ホーマーを語るといつてもイリアドの中でアチルス對ペトロクラスのエピソードに限つて、それから作者としてのホーマーの肖像を描いてみたいと思ひます。

イリアドは一人の筆になつたものか、それとも數人の人の合作であるかといふことは研究者間で議論の問題になつて居ります。然し第二十三卷で大略五十行に渡るアチルス對ペトロクラスを歌つた詩の部分を書いた人が、よしんばイリアドを合作としても、それに關係した合作者中で一番重要な人であつたに相違ない、さうしてその人は誰でもない、ホーマー其人であつたと信じられます。アチルス對ペトロクラスの部分がなぜさう重要であるかといふに、それは外でもない、それを讀むと歌つた人の個人格が明瞭に顯はれて來るからであります。即ち詩人ホーマーの眞實な心の聲がアチルスといふ媒介者を通じて響いてくるからであります。友人ペトロクラスを失なつたアチルスの悲劇に何たる嚴肅と何たる

苦痛があつたであらう。私共はこの一節を讀んで居ると、アチルスといふ古英雄の悲痛な慟哭に動かされるといふよりは「悲哀に沈むホーマー」の悲劇に耳を敏てるのであります。さうしますとホーマーは誰を悲み誰を哀哭して居るのでせうか。それは資料が無いので人を領せるに足る返答は答へることが出來ますまい。然しホーマーが慟哭する本當の人は誰であつてもよい。私共が重視する所は如何に眞摯で麗しい友情の人でホーマーがあつたかといふ點であります。アチルスが友人ペトロクラスに注いだ眞實な友情は即ちホーマーが持つて居つた友情で、この古詩人はフレンドシップの權化であつたやうに思はれて來ます。トロジヤン戦争に關聯する挿話は澤山あつて、そのいづれも詩人の感情と思想を盛るに十分な題材であつた。その中で特にホーマーがアチルスの友情で力説した理由は何處にあるでせうか。どういふ友人であつたかは知らないが、ホーマーは唯一無二の友人を失つて終生治療することが出來ない心の損傷を受け、この慟哭の捌口をアチルス對ペトロクラスの挿話に見出したものであらう。彼は確に大事な友人を失つた結果、詩歌の光で眞暗な世界を照すより道が無つたであらう。然し私共はこの爲め偉大な詩を得ることが出來たので、

それに對し深い感謝を持たねばなりません。英國の某批評家が申しているやうに、天下あらゆる詩を通じて慄く感情の點から眺めてこの一節以上に出る文字は無いのであります。

アチルスは死んだベトロクラスを夢に見ます、ベトロクラスと共に青年時代の追憶を語つて一緒に葬りたいと云ひ、アチルス自身の死を豫言します。アチルスは友人の願望を承知します、さうして『だが僕に近寄れ、しばしの間互に抱合し合つて恐しい哀泣に耽りたい』と語ります。アチルスはベトロクラスの體に觸れようとしたが無益でつた。彼はかう言つて居ります、『終夜憐れなベトロクラスの魂は僕の側に立つてゐて唸り悲しんだ、さうして細々と命令する所があつた。彼は驚くべくも在りし日のやうに見えた。』かういふ言葉の下にホーマーの個人的悲鳴が秋夜枯葉を拂ふ灰色の風のやうに響いて居ります。アチルスの悲劇を語るに當つて彼は他人として客觀的に取扱ふことが出来なかつたに相違ない。人名こそ別の人名で歌つてあるが、ホーマーは自分の悲劇をイリアドの中で歌つて居るのであります。さうしてかういふ風に眺めるといふことは、必ずしも牽強附會なこじつけでないであらうと信じます。

所でホーマーの研究者の説を聞くに、假りに前記のことが眞實であるとする、彼が斯くまで慟哭して一緒に墓場で葬りたいとまで叫ぶ友人はホモセキジュアルな友人即ち同性の愛人であつたであらうといふことであります。末期時代に於ける希臘では同性の愛は極めて普通の事であつたそうです。アチルスは自分の女をアガメムノンに奪はれて一時は非常な憤怒を感じてゐたが、それも忘れてベトロクラスを殺したトロジヤンスと戦争に出掛て居ります、即ちアチルスは女に對する以上に友情を重く考へたのです。ホーマーにどんな女と關係があつたかは知らないが、アチルス同様に友情の爲なら死をも辭しなかつたであります。イリアドに戀愛がないといふことを論じて居る批評家は澤山あります。作者としてホーマーが女の戀愛を輕視してゐたものとする、詩の結果がそれに觸れてゐないことは自然であります。ヲデイセーの方には婦人が取扱つてあるといふ點からイリアドと同作家の手に成つたものでないと主張する人もあつて、英國のサムエル・バトラードは、ヲデイセーは婦人の作家だと論斷して居ります。

近代のスチーブンソンに始めて古代のホーマーに話は渡りましたが、この文の要點は夢

の文學には一般想像されてゐる以上にその作家の個人格が暗示されて確適な肖像を描き出すことが出来るといふことでもあります。私自身は夢と現實の兩世界を一つと見て、夢には實際生活を警告し指導する神聖な天啓があると信ずるものでないが、實際の世界も夢の世界を認めて私共の人生は一層擴大されるであらうと思つて居ります。私は夢の信者でないまでも、決して夢を否定する物質論者でないといふことは斷言出来ます。考へて見ると、私共の人生といふものは不思議なものであります。この不思議な姿を傳へるに當つて、どんな文學者でも絶対自由を持つて居ります。絶対的自由で自分の感情と思想を飛躍させる所に文學者の力を認めなければなりません。

愛蘭文學の回顧

咲いた花なら時來たつて萎むであらう。この傷しい自然の法則を私は文學の上でも見る。二十幾年前始めて英詩界の空に大きく横に五色の虹を描いた所謂愛蘭文學運動も今では消えて跡が無い。昨年イエーツがノーベル賞金を與へられたが、その事が私の耳には彼一派の文學運動を弔ふ悲痛な挽歌と響いた。又エー・イー（ジョウジ・ラツスル）がイエーツと一緒に愛蘭自由國の最高顧問に推擧された事も云はゞ一箇の墓碑銘であるに過ぎない、彼等の文學的仕事は天の命數が盡きたのだ、然し彼等の仕事は佛蘭西の表徴運動と共と世界文學史に永遠の數頁を占めるに相違ない。私は今その跡を辿つてみたい。時は萬籟寂として聲のない冬だ。私の書齋の火は冷たい。書齋に懸つて居るイエーツの肖像も寂しい。はるかに彼を思つて轉傷心の感が多い。

私は愛蘭と印度を分けて考へることが出来ない。何れも英國の鐵槌的な支配を受けてそ

の下で動きが取れない國だ。彼等兩國人は所謂亡國の民で、極端な樂天家となるか乃至は悲觀論者となるかの外は無い。即ち愛蘭文學で見ると、エー・イーは前者を代表しイエーツは後者に屬する。私は印度の事を他日に譲つて此處では愛蘭だけ文學的に論じようとするのである。

讀者は第一に愛蘭人には國語が無い、歴史が無い、それ以上に國が無いといふ根本的事實を知らねばならない、さうして愛蘭の青年（二十幾年前の青年も今では半白の老境に入つて居るが）……彼等は三つの決心を持つて文學的に覺醒したことを知らねばならない。三つの決心とは何であつたか。第一に國語のない彼等は手近な英語から自分の目的に相應しい表現の様式を作ることであつた。第二は過去の詩歌に歸つて精神的王國の存在を認めることであつた。第三は彼等が再發見した文學的遺産の上に自分の新文學の根底を据えるといふことであつた。これ等の三つの決心は精神的には極めて悲壯なものであつた。さうしてこの文學運動が燃えるやうな熱烈な愛國心の背景を持つて、驚くほど美麗な攻撃の態度を取るに至つたのである。

所謂愛蘭文學運動はアツタツクの文學である。國內では文學的新教の力で傳統的に國民の心を支配して來た正教派的文化を破壊することで、又國外では愛蘭の存在を認めさせるといふ愛國的行爲となつたのである。世の輕卒な人は、この愛蘭文學運動をそれと前後して起つた英國の新詩運動と並べて論ずるが、この二つのものはそも／＼出發點が相違して居る。決して混同すべきもので無い。只時代を同じくして顯はれた運動であるといふこと以外に何等の關係が無い。英國の新詩運動は新しい詩の音律に覺醒して、前詩人未發見の詩境を自覺の力で發見し、さうして自己を制限し時には腐敗させて來たヅキクトリア女王朝文學の惡影響から自分を救助することであつた。一言で蔽ふと英國の新詩運動は凡俗主義に對する自己防禦がその主點であつた。若しこの運動（運動といふ名前を附けることが出來るとすると）に攻撃の鋒先があるとしても、それは『自己防禦』が放つたものであるに過ぎない。それを愛蘭文學運動に比較すると、その依つて起るに至つた精神が全然異つて居る。私の友人で今日印度に居る詩人のジェームス・カズンズはかう云つて居る、『宗教的には基督新教徒と云ひ文學的には異端者とも抗議者とも呼ばれるプロテスタントの仕事は

即ちプロテストする點から始まる。僕の文學的仕事も其處から出發したものだ。僕の二十三歳の時、倫頓のクリスタル・パレスで偶然愛蘭人を冷罵する滑稽畫を見た、僕は怒つた、さうして僕は國へ歸つて英國人に反對する前に自分の國人に對して文學的挑戰をせねばならないと決心した。「諸君はプロテスタントの神を愛して有ゆる加特力教徒を嫌はねばならぬ」といふ一文を書いた。自分は愛國心に燃えたが、その前に自分は自國人を嫌はざるを得なかつた。所謂愛蘭文學運動に直接關係したと認められる三十人の殆ど全部は新教徒であるといつてもよい。さうしてこの新運動を起すに至つた動機は三十人共に大略同じであると云へる。即ち反愛蘭で新教徒である少數者の仕事である。』

數年前には日本に於て『萬葉へ歸れ』といふ言葉が有意味の宣言と受取られた。果して幾人の歌人が眞實のインスピレーションを古代の詩歌精神に發見することが出来たであらうか。古代へ歸れといふことが日本人に必要なばかりで無く、何處の國の新文學でも古代に於ける人民の文化とジニアスが近代の時代精神とどんな關係にあるかを知つて、其處から眞生命を培養せねばならない。愛蘭の青年詩人が文學の出發點をこゝに据えたといふことは

賢明なことである。又英國の新詩運動も自然の行爲としてこの點を是認する至つた時、英國の詩壇と愛蘭の新文學とが密接の關係を持つたのである。イエーツがブレークを賞讃したりフランシス・トムソンがシェリーに新しい意味を發見したといふことも自然であつたと同時に、英詩壇でもボウガンやハーバードを前記のブレークやシェリーと同様に研究するに至つたのである。かういふ譯で、出發の精神では英國愛蘭兩國の新文學は異つてゐるが、次第に手を携へて英語詩の復活的生命を主張するに至つたといふ點も注意せねばならない。然し何處まで行つても愛蘭人は英國人とは先天的に異つた魂の所有者である。彼等は英國人のやうに人間靈を文學から救はふとするもので無い。どんなに英國の新詩人が宗教に無關係の態度を取つても、どこかにそれに捕はれた所がある。愛蘭の青年詩人のやうに無邪氣に宿命的に美を宗教とすることが出来ない。又美を愛國心に結び付けて歌ふことも出来ない。英國人が愛國心を歌ふといふ場合になると、いつも彼等は不自然である。理論的である。近い過去に於ても英國のテニスンは宗教的疑惑と闘つた、又ブラウニングは宗教的疑惑に超絶して居るが自己の信仰に捕へられた。彼等に反して愛蘭の文學者は無宗教

と思はれる位に宗教を疑はなかつた。短くいふと彼等は宗教に無頓着である。もつと眞實にいふと、彼等は宗教的ではあるがそれに捕はれない不思議な人民である。既に宗教を疑はない、故に彼等は自然である。既に宗教に無頓着である故に彼等は無邪氣である。既に宗教的であつても決して捕はれない故に彼等は宿命的である。

私はいふことを聞いて居る、愛蘭の山の中で子供でも失へることがある、さういふ場合に警官はまづ枯れた樹木を蒐めて火を附け篝火を作る、さうして誓ひの言葉を唱へてから失つた子供の捜索に従事する。この一小話から想像しても、如何に愛蘭人が迷信的であるかを知ることが出来るといふものだ。然るにこの迷信が彼等の信仰を害しない點を考へると愛蘭人の心理状態は特別である、即ち矛盾である。此矛盾がどんな愛蘭人にもついて廻つて居る。バーナード・シヨウを始め米國の田舎で下女奉公して居る名の無い娘に至るまで矛盾の性質を持つて居る。信仰の上の矛盾といへば、日本人も愛蘭人に劣らないと思ふ。近代の日本人は近代の愛蘭人の如く無宗教であらうが、日本人の大多數は愛蘭人の大多數のやうに宗教的である。日本人大多數の宗教的信仰は様々の迷信の爲めに弱められ

て居らない、言ひ替ると信仰迷信ともに力強い。さうして更に一步を進めていふと、日本人の個性は如何なる宗教的信仰でも又迷信でも傷付けることが出来ない不思議な國民だとも云へる。若しこの點を偉いといふことが出来ると、愛蘭人も日本人の如く偉いと云はなければならぬ。他國の文學であり乍ら日本で愛蘭の文學が非常によく理解され澤山の共鳴者を見出して居る所から見ても、どこか日本人と愛蘭人と性質上に相通する所があるからでは無からうか。少くも矛盾な國民性を持つて居るといふ點では彼等兩國民は類似して居る。若し日本が文學的に愛蘭に劣つて居るとすると、それは日本にシヨウやイエーツの居らないといふ點である。これは残念なことであるが、それ以上私が残念に思ふことが一つある。それは外でない……日本人の心理状態は愛蘭人のその如くに深くない。愛蘭人、少くも愛蘭の青年文學者、彼等の生命は五官だけで支配されて居らない。

彼等は五官以上の大きな精神的世界に住んで更に大きな生命に覺醒して居る、概念的にいふと彼等は永遠性の存在を認めて、彼等の眼は何處でも外部と内部とを合一する、内面的精神が外面的物質から産れるかの秘密を見ることが出来る。彼等の詩歌は永遠

性の認識から來るといふことが出来る。この愛蘭人の特質は古い時代から彼等の哲學にも詩にも顯はれて居る。この特質は外面的には廣いが、内面的には内氣なもので従つて夢想的であると云へる。外面的には平面的であるが、内面的には立體的な深さを持つて居る。

愛蘭に二種の詩人が居る。其一は愛國心を外面的に取扱ふ詩を書いてナシヨナリズムを主張する。それに反して他の詩人はイエーツの仙女のやうに、薄い絹の衣裳を着て雲と雲との間を柔な足で歩もうとする。前者は地上の樂園は愛蘭に無ければならないと主張するけれども、後者は天國にその理想境を發見しようとする。然しかう彼等兩人は異つて居るが、愛蘭人にとつては彼等の兩方が共に自然に見えて何等の不思議が無い。前にいつたやうに、矛盾の人間であるから他國の人間に不可能の事や物が彼等には可能である。彼等の特質は矛盾を單に矛盾として終らしめない點にあるとも云へる。彼等は矛盾と矛盾を結合して自然たらしめる……此處が彼等の面白い所である。私自身はこの特質を價值づけて、個人的にも彼等を友人として居る。又非個人的には愛蘭に非常な興味を持つて居る。實際彼等には無責任な頼りない所があるが、彼等位愉快な人間は他に求められ無い。

上記の國民性から所謂愛蘭文學は産れたものである。歴史的に考へると、愛蘭の古代文化は詩の精神に結び付いて幾世紀間に渡つて居る。日本古代の萬葉人が詩歌の人間であつたやうに、愛蘭人も詩の人間である。愛蘭人の書いた言葉を信ずると、王様は詩人で歌の王冠を付けて居る、法律も詩人が作り又歴史も詩人が書いて居る。千年も以前に愛蘭で國民軍の一人となるには、十二冊位の詩集の名前を知らないと成ることが出来なかつたさうである。英國人が詩の平仄がどんなものであるかを知らなかつた時に、愛蘭人は二百種以上の詩形を持つて居つたさうである。英國では百年以前にウオヅウオスが始めて自然の何物であるかを發見したと云はれて居るが、愛蘭人はそれを千年も昔に既に發見して居る。十九世紀に至つて英國は英語を以て一般的國語とせよと彼等に強るに至つたが、彼等の眞精神は却つて彼等の古代精神に歸つて、激烈に彼等の愛國熱が燃えはじめるといふ結果に成つた。

カズンズはいつて居る、『所謂愛蘭文學運動は復活運動でない、愛蘭には何物も復活させるものは無い、故に復活運動といふ文字は愚かな言葉だ。英國は佛國革命の影響を受けて

工業時代に入りそれから殖民地擴張時代を作つて、英國文學も従つて非常に膨脹するに至つたが、英詩の眞精神は失はれた。所で、英國が失つた詩歌の生命を拾ひ集めて、自分を發見したのが愛蘭文學者である。』なるほどかう聞いて見ると、愛蘭文學運動は復活運動といふのは當らないが、文學の國體的表現として種々な興味のある諸相を持つて居る。英國のアンゲロ・ノルマン文化が愛蘭へ侵入して、愛蘭在來の文化を破壊しようとした初期時代に於ても、愛蘭の詩人は盛んに愛國の詩を作り自由を歌つたものだ。その時代では自分の名前を公然出すことを恐れて、みな匿名、さもなければ雅號を使用して居る。この文學的習慣は永らく繼續されて、それが近代詩人等に一種神秘的感さへ與へて居る。十九世紀になると愛蘭人の反英國政治運動はバリアメンタリーの争鬪となり極めて露骨となつた。文學の上でも彼等はバラドや所謂ソングを作つて政治的に使用して居る。この理知的傾向は却つて彼等の純な古代精神を愚にも傷け、彼等の散文的な行爲は彼等の尊い幻想を危険ならしめるに至つた、かういふ愚昧な無趣味の時代に文學を提げて起つた大きな愛蘭人はファグソンである。其人は今日の所謂文學運動以前に文學運動に目覺めた最初の詩人であ

る、歴史的に今日の文學運動を論ずると、この人を以て始めねばならぬであらう。

然し新しい意味に於て愛蘭文學を開き且つそれを育てた詩人は誰でもない、即ちイエーツ其人である。彼が千八百八十九年に出した「ユシーンの漂泊」といふ一書を以て新運動の幕は開いたと云はねばならない。私は「ユシーン」と發音して居るが愛蘭人は別の發音を持つて居るかも知れない。手近にそれを質問する愛蘭人が居ないから假に「ユシーンの漂泊」として置く。この書物で詩人イエーツは古い愛蘭の傳説に新しい個性を入れて居る。單にイエーツ一個人の聲を聞くばかりで無く、この書から愛蘭人といふ人種の聲を聞くことが出来る。それは内面的に深い根柢を持つ愛蘭人の心から滲みでる聲である。

イエーツは世に稀な幻想家である。幻想家として彼は美の殿堂を築き、その灰色の空氣のなかで靜かで麗しい詩の儀式を執行するリチュアリストである。内面の神秘世界が半分彼にその戸を開けた、さうして彼はその半分開いた戸から遠方に横たはる廣い深い靈の世界を眺めた。彼は使命を持つて居る、それは美を暗示するといふ使命である。然し彼は美の言葉を持ちすぎて、これが彼には犯罪となるに至つた藝術家である。大地と空中の水の

なかゝら彼が作りだす美の夢は永遠に白い光線を放つて居るが、それはステインド・クラスのやうなもので現實味に缺けて居る。美は美でも夢のなかに顯はれる美であつて、私共と内面的精神との中間に立つて居るの感がある。然し私共はその爲めに邪魔されて居るとは思はない。彼が描く美の詩は驚くべき色彩と構圖とを持つて居るが、實際をいふと、その爲めイエーツ自身は裏切られて居るの傾きがある。彼の作品中には澤山の劇があるが、畢竟するに彼は劇作家で無い。自分を劇に假装させた獨白家であるに過ぎない。

私は今イエーツからエー・イーへ行つて全然異つた世界を見る。此處にはイエーツの世界で聞いたやうな音楽が無い。カズンズはエー・イーを日本座敷の障子に譬へて居る。この意味は障子を打開けるとばつと詩の光線が左右から入つて來るといふのである。エー・イーはイエーツと反對に現實家である、否現實といふ詳細から理想といふ虚偽の世界を作る靈の詩人である。表現の文學者としては、外面的には節約を主として居り乍ら内面的には言葉の浪費家であると云へる。彼の詩は決して文學的でも理論から書いたもので無くて體驗の告白であるに相違ないが、彼の哲學が國境を無視して居る爲め、前にいつたやうに極端な

樂夫家になつて仕舞ふ。この文學的悲劇は必ずしもイエーツの夢想家乃至は悲觀論者となる悲劇以上で無いかも知れないが、エー・イーは大詩人となるには何か缺けて居るやうな感がある。愛蘭人に云はせると、彼は今日存在せる最大詩人で、一あつて二無きものであるさうだが、私共がタゴールに持つて居ると同様の不平を彼に持たざるを得無い。彼は現實を尊重して居るに係らず出來上つた作の上でそれを否定してゐる。又一方のイエーツは美の夢を歌ひ乍ら、現實を忘れることが出來ない爲めその夢も日中と夜との間に横たはる薄暮に過ぎない。然し私は彼等兩人から大きな感銘を受けたものであることを語るに何の躊躇を持つもので無い。私は彼等を畏敬して居る。

エー・イーとイエーツとを中心とし、又彼等の有力な鼓舞獎勵を受けて澤山の青年文學者が顯はれ、此處に所謂愛蘭文學運動を旗揚するに至つたのである。是等の連中を大ざつぱりに大別してエー・イー派とイエーツ派とすることが出来るのも自然であらう。前者は外面に即し乍ら内心を眺めようとする、又後者は愛國を歌つて永遠を説いて居る。私の友人カズンズは年齢の上からいつても、エー・イー並にイエーツの次に論ぜねばならない人であ

つて、彼はエー・イーに類似して居る點が多い。

カズンズは私が數年前日本へ呼んで慶應で詩を講じさせたことがあるので、其名前は日本で未知のもので無い。彼の日本滞在は僅か七八箇月間ばかりであつたから彼と日本との關係を文學的に作ることは出来なかつた。然し個人的に彼を記憶して居る日本人は多少あるであらうと私は想像する。ドクラス・ハイドが彼を評して、『北方の體に宿る南方の魂である』といつて居るが、これ以上の適評は有るまい。カズンズの『北方の體』が自分を主張すると彼は理想家となる、また彼の『南方の魂』が動き始めると彼は抒情詩人となる。イエーツを中心とする連中からは最初から彼は『疑ひ深き眼』で眺められて居つたさうだが、これが間もなく事實となつて、現に彼は印度に住んでアニー・ペサント夫人と一緒にセソフキーの詩人となつて活動して居る。彼は以前から最初の友人と離れて仕舞つて居る。彼の論理的感念は彼を單に言葉の畫家たらしめない。又詩の形式に對する彼の尊重は彼を所謂西利的セルティックの感情から離れさせる所がある。其點が彼を印度人と結び付け、又印度で彼が高く價値づけられて居る理由でもあらう。カズンズと共に文壇に顯はれた青年をラサ

リバンとジエームス・スチーフンズがある。ラサリバンは古典的愛蘭の傳統に靈示を發見し、スチーフンズは革命的文學精神に不思議な銳氣を注いだ。

それから後輩の詩人としてはバドリツク・コラム並にジョセフ・キャンベルが居る、又エラ・ヤングといふ詩人も居る。然し私のこの文は彼等の作品を詳論するのを目的としてゐない。私の目的としては、エー・イーとイエーツさへ論ずれば十分である。若しこの文で文學上に於ける愛蘭人の特質を語ることが出来たとすると、私は十分に報いられたものとして喜ぶものである。

雪の日にエマソンを思ふ

今日は雪降りだ。書齋の硝子戸を蔽つてゐる幕を開けて、聲を殺してしとく降る雪を眺めると、私は二十幾年前に返つて『コンコードに於ける雪の一日』を思出す。所謂「巴」と降る眞白な雪を踏んでエマソンの舊跡を訪問すると、山川草木悉く暗涙に咽び、米國で一あつて二と無い巨人を弔ふ挽歌が縷々として盡きないの感があつた。今日米國文學の中心は暮斯敦^{ボストン}附近で無い。嚴格な意味からいふと、大西洋岸の都會紐育でも無く、氣鋭の生氣で溢れる中西部が米國文壇の中堅であらう。然しだ、哲人エマソンがニュー・イングランドで建た思想の殿堂は永劫に亡び無い。信者の一人として私は廿年前の或雪の日に、詩の靈が沈黙から沈黙へ、思想から思想へと歩くとも感ぜられる殿堂のなかで、熱心な無言の祈禱をエマソンへ捧げ彼が建てた生命のインスピレーションは時と場所を超越して善良であることを喜んだ。彼は單に趣味を教へる宗匠でも倫理を宣傳する道德家でもなく、

人間本來の精神を新鮮に完全に維持する一本筋の大道を示した眞實な哲人である。哲人が森の東に山の西に建てた文學殿堂は私共の人間世界より更に年取つた光で輝いて解脱の路を求めて居る。暗い外部と反對に内部は有ゆる靈の表象で満ち、千年萬年経つても變化しない想像が絶對的な美と莊嚴を作つて居る。この殿堂に於て始めて、悲いが美はしい靈と靈との接觸が成立する。古くく詩歌が驚異の震動で反應するのを感じる。私共は情熱と戀愛の新しい時代が歸つて來るのを覺える。此の孤獨な靈の殿堂では、崇敬欽仰の言葉を想像へ載せる、最も古くて最も新しい藝術の力で眞實な人生を作ることが出来る。「荷車を天上の星に繋ぐ」といふ銀鈴の聲を發する名文句がエマソンにある……即ち其處が彼の中心思想だ。彼は決して地上生活を忘れる空想の人でない。天上と地上の兩生活を一丸にする理想世界の建設に彼の努力は傾注されてゐる。

彼はよく英國のカーライルに比較されて居るが、私はこの點に異議を持つて居る。後者は前者のやうに、神を説き美を歌ふことが出來たか。自分と同時代の事件を批判し世界を歴史的に評論する力はエマソンになかつたかも知れないが、單に一國一城を物質的に征服

するのが彼の仕事で無く、彼は自由な信念で天國を打勝とうとした。一言で蔽ふと彼は豫言者であつて、彼の豫言は悉く温かい生きた血汐で飛動して居る。

降りしきる雪を書齋の硝子戸越しに眺めて居ると、不思議にもこの東中野がエマソンのコンコードと變つて、偉大な彼の靈が木から木へ渡るやうに感ずる。彼は私に思想の力は亡びない希望と感謝を産むものだと思へた。彼は天啓となつて私に顯はれ、考へる習慣と永遠の意思に生きる道を教へた。言葉は古いが、自己判断と自己信頼の力で人間生活を完成する秘密を私は彼から學んだ。彼は宇宙の法則と人間の規約とが、丁度水と雲との関係のやうに離れるもので無いことを教へる。私は今書棚の中から彼の評論集を取出して二二章読んでみる。彼の文字は熱で焼ける、光線で輝く、風雨が朗な音律に乗つて私の眼前を走る。思想を背景とする彼の散文位力強いものが何處にあるだらうか。完全な機能を言葉に發輝させる點から見ると、彼は有らゆる世界を通じての文豪である。彼の言葉が發する音律には、所謂金石の響がある。彼の言葉は幻想から幻想を呼び起す、比喻から比喻を産出す。神秘から神秘を誘つて居る。雄辯の結果ヲブスキュリチーに入るといふ場合が彼に

無いではないが、彼の賢明な智識と穩健な洞察力は順序よく彼の思想的進みを明示し又暗示して居る。特に圓熟期に於ける彼位善良な心の平衡を得た文學者は他に發見され無い。晩年に於ける彼は人を舞踏させない熱狂させ無いかも知れないが、たれか彼の人に與へる智識と考へさせる暗示に對して感謝しないであらう。

私は此處でエマソンの哲學を論ずるので無い。然し「詩人と哲人との接近」といふ點からウオヅウオースを論じなければならない如く、エマソン論では到底彼の思想へ渡らなければならぬ。彼は詩を散文以上に尊重し、詩人を哲人以上に置いたであらうか、詩人として彼は所謂永劫の諧調を所有したであらうか。哲學的思想が自分を反省的心理へ引込んで行くといふことが、彼の詩の上に障蔽の一種と成らなかつたであらうか。自然は靈の力で生きて居る、靈は水上に動いて居る、靈は山上に休憩して居る、自然には一定不動の計畫があつて其完成を急いで居る、さうして人間はこの計畫に加はつて、讚美すると同時に其責任を分たなければならぬ……エマソンの信する所は正に是である。彼は完全な意味で、樂天論者である。然し彼の樂天主義は無責任な微笑でない、尊敬心で満ちる行爲から

溢れる満足の微笑である。彼は自然を尊敬することで自分を歎美して居る。

宇宙萬物を一貫してどんな時でも亦どんな場所でも遍在する靈の生命を信じ、人間も宇宙といふ大管絃樂に加はる一音符であると思つた點から見ると、彼は有神論者である。彼の文學を支配する有力なフォースは普遍性の意識である、故に彼を汎神論者だといふことが出来る。彼が澤山書いた書物は詩にせよ又散文にせよ、皆なこの信條の報告である。この信條を極めて廣義に了解した記録である。彼はこの信條を破壊しない限り、善良であれば如何なる思想でも感情でも喜んで取入れて居る。彼は世界中にある如何なる書物にも敬意を拂つて、所謂智識を古今東西に漁つて居る。彼に對する宗教とは何であるか。人間生活を善良ならしめるものゝ外何物でも無い。眞實の生命のある所に宗教がある。人間がその生命を失つて、神から離れた場合位寂寞なものには無い。不健全な孤獨の境地が即ち失はれた人間の落ちる地獄である。

彼は超絶哲學者だと稱されて居る。其の名前が示すやうに、彼は勿論内省を主とするものに相違ないが、過去から教へられた外面的知識を整理して自己確立の背景として居る。

彼は依然たるプラトウ流の理想論者であるけれども、又アリストートル一派の歸納主義にも反對するもので無い。エピキュラスの快樂主義を否定しないと同時に彼はまたストア學派の道德論理即ち英雄的な自己否定の禁慾論にも敬意を拂つて居る。彼は所謂活眼をきつと開いて世界人生を凝視した。そして哲學者たるといふことが決して立派な紳士となることを妨げないことを知つた。

彼はブルタークが後世に残した英雄論と共にモンテーンの物質的歡喜と哄笑とを理解して其等を巧みに握手させて居る。スウェデンボルグの神秘主義を信じたけれども彼自身はそれに飲まれたのでは無い。彼に希臘の修辭學派の修辭を喜ぶといふ傾向があつても、彼は之を眞似したものでは無い。彼はあらゆるものから學ぶ所があつたが、決して自己を忘却したのでは無い。即ち古い哲學に對し新しい文學を與へたに過ぎないといふ論者に對して、私は、『天の下新しいものあるか』の一言を呈するより外何物をも知らないのである。

彼はプラトウに負ふと自分で云つてゐる。理想主義は神秘主義と離れたものでなく、この兩主義も現實の洗禮を受けないと生命が無い。彼は現實の力でこの兩主義を一つのもの

として結び付ける。さうして眞實な理智が無いと現實の力が得られないと彼は信じて、一生彼は理智を磨くことを忘れ無かつたのである。彼は青年時代から死ぬまでプラトウを師と尊敬した彼は「すべてのものがプラトウから出て来る」とさへ書いて居る。然しエマソンはプラトウを一步進めて得たものであらうか。それとも單にプラトウを眞似たものに過ぎないか。彼等兩人の類似を發見することは容易な仕事である。エマソンの運命論乃至倫理上の觀念は正しくプラトニアンであると云はねばならない。

ニュウ・イングランド人は先天的性質として人を教へることを好み人から學ぶことを喜ばない。然るにエマソンはそれに反して、善良なものであれば如何なる書物からでも受け入れて居る。彼に向つては何の學派もない、従つて個人的に誰にも師事して居らない。其點で彼は萬物から智識を漁つたといはれるセクスピアーに似て居ると云へる。エマソンは詩人として又思想家として、創造者で無い。世界から善良で眞實だと信ずる所のものを借用して利用し盡して居る所謂總勘定の感がある。然らば彼は米國特産の文學者といふことが出来るだらうか。實際彼はウキットマンが米國人であるといふ意味での米國人で無い。

今日の米國でも多少さういふ所があるが、特にエマソン時代には米國に特有の文化が無かつたとも云へる。有ゆる過去の智識を無差別に世界から借たといふ點では日本人に類似して居る。さうして見ると、彼もまた時代の精神を善良に代表したとも云へる。彼の缺點は即ち彼の時代の缺點であるかも知れない。

彼は穩健な英國人の血統を祖先から受け、「修養のある嚴肅で實際的な牧師の八代」といふ歴史を持つて産まれて居る。彼自身も父や祖父のやうに牧師の職を持つて一時は幕斯敦に於けるユニテリアン・プリーチャーであつたが、其教理の束縛を嫌つて間もなく宗教界から離れ、彈丸黒子の一村落なるコンコードへ隠退して文學者としての一生の幕を開けるに至つた。詩人として、講演者として、評論家として、思想家として、一般的インスパイラーとして彼の一生は充實したもので、コンコードを新思想の出産地眞實の自由を養育する研究所として完成させた。彼は此處で、辯舌の上で實際的行爲の上で理想と智識を完全に合せた。彼は二度まで大西洋を渡つて、智識を歐洲に求めたけれども、熱烈な愛國家としての感激に満ちて歸國して居る。彼の時代ばかりで無く、其の次の時代に於ても亦次の

次の時代に於ても、この一寒村コンコードを米國近代の學堂であるかの感を與へるに成功した彼の仕事は外面的には無變化であるが、内面的には偉大な光榮で満ちたものだ。此處へ來る來ないを問はず、彼の崇拜者はコンコードを眺めて彼の光輝あるブレンシングに浴するのである。この文の筆名である私自身も、數の知れない彼の信者の一人である。

彼は詩人であるか乃至は哲學者であるかの問題は常に米國の評壇を賑はして居るが、彼は詩歌の音符を持つて産れ、詩人の耳と眼を持つて産れた哲學者であるといふのが至當であらう。詰り哲人であると同様に詩人であつたのだ。自己表現の方法として詩を是認したばかりで無く、特種な場合に彼は詩の形式を完全に支配し得た人だ。今私は哲學とはどういふものか、又詩とはどういふものかを考へて見る。哲學は自然の外面的諸相を調査する、研究する、さうして内部に潜在する根本的感覺機能が何であるかを發見する。簡単な言葉でいふと、自然の顯す宇宙心が如何な場合に人間の靈と合同し認識し合ふかを知る學問である。哲學は自然の外部から内面にある根元を極めて其變轉進化の道を研究する、即ち無限の變化から最後の統一へと遡る學問である。然るに詩は何であるかといふに、諸現象の精

神を目的とすることは哲學と同様であらうが、表現の方法の上では詩人は藝術家で無ければならない。詩人は内部の統一から外面の變化へと進む人間で、詩では純な根本思想より官能で感ずることが出来る表象へと移らねばならない。無形の精神を基調とするけれども有體の變化を表現するのが詩で、アイデアルからコンクリートへ向ふ者であらう。エマソンは本質的に詩人であつたであらうが、哲學と藝術との中間に彷徨した場合が多い。詩にも哲學の考案上と同じく、自己表現と審美的創造との二つある。前者は内面的發露で其飛躍は自然である。其聲は婦人性を帶て感激し易い。後者即ち審美的創造には法則がある整理がある、男性的忍耐を持たねばならない。若しエマソンがこの二つのものゝ何れにも屬しない場合があるとすると、それは彼が詩人としては思想に捕はれ過ぎ、藝術家として餘りに自然に信頼し過ぎたことを意味するのである。彼は靈の表現を詩の全部だと了解した爲め、彼はいつも單一の基音のみで動いて居る、故に詩人として彼位單調な人は無い。然し議論の上では彼は藝術を尊重して居る。又藝術といふ言葉を普通の了解以上に、廣く深く取扱つて居る。「大思想は音樂的表現を保證する、想像が目覺める所に言葉がある、

それは常に音楽的である、『如何なる言葉で詩が書かれても、その音調自身が詩の秘密だ』などいふ彼の文字を読むと、彼は餘りに抽象的で、外面的表現より内部精神を重要視する彼の態度を是認すべきであるが、藝術家として彼は無責任であつたやうに思はれる。ロウエルの如くエマソンを散文の上に於ての詩人であると評するものが多い。如何にも彼の散文は詩的である。日常生活の意識と智識が光明の衣裳を着けて居る。彼の散文は光線と暗影が音楽的諧調で整理され、彼の詩に於けるより以上に明瞭に内部精神のエッセンスに到達して居る。あゝ、如何に彼の散文が魔法的壓搾に懸けられて三稜形的美を發揮して居ることよ。彼の散文を撃つと、其處に朗々と響く響の聲を聞くことが出来る。

一般的にいふと彼は智識で優れて、眞理を第二位に置いたやうにも思はれる。智識と眞理とは相違したものだ。如何とならば、前者は自分丈を中心として居るが、後者は外面的な眞實な表象から出發せねばならないからである。エマソンは自然に信頼し過ぎたと信ぜられる位忠實であつた……この點では、英文界廣しと雖も彼に對する匹敵者は無い。彼は單に自然が彼に耳語する低聲を聞いたのみで無く、オリンパス山上から響いて來る神聖な

高い聲にも耳を聳てた、彼は散文詩人として何處までも智識を想像の酒杯で盛つて居る。彼の上乗の散文を読むと、如何に彼が突發的で、如何に彼が理想的で、如何に彼が友情的であるかを知ることが出来る。彼の思想は一句々々と夏の雲の如く湧いて居る、所謂警句が踵を接して居る。想像が想像を呼んで居る。其處に精神的光明の輝きがある。實に彼は人の核心を撃いて直に眼前に抽象の世界を擴げる。彼は述說的であると同時に批評的で、私共は彼の豊饒な言葉に驚かされざるを得無い。

彼は善良なコンコードの村民であつたと同時に、一個人として完全に近い紳士であつたに相違無い。情熱に動かされ感激し易い時代に産れて、彼は確適に自分を整理し盡した偉人である。

降る雪は止まない。私は「雪は人生を純白ならしめる」といふ句を胸に浮べて、エマソンから抽象世界の功德を學び、進んで私自身も抽象の純白世界へ突進したいと希望する。

バイロンの百年祭

バイロンの一生は劇的である。時の事情が偶然に彼を劇の主人公にしたのでなく、彼の好劇的性質が自分で正當な舞臺を作り、その舞臺の眞中でどつかと坐つて一人舞臺を踏みどよめく觀客の前で六法の引つ込みをしたといへる。如何なる人生の俳優でもさうであるが、彼も『人に與へる印象』を重大視した。また彼が持つて産れた事情が手傳つて、彼は人の注意を樂々と容易に引くことが出来た。彼自身よりはむしろ觀客の方が神秘的濃霧で彼を取捲いて、彼の劇的効果を一層顯著ならしめて居る。彼の一生は寧ろ悲劇に屬すべきものであつたが、劇としての調子が男性的騒音で支配されてゐた點からいふと、まづメロドラマに類似して居るといへる。

バイロンの詩乃至一生には、たれでもその力に壓迫させられる。實際「いゝ」とか「悪い」とかいふ批評以外に立つて居る。マッシュュー・アーノルドは、「沙翁以來英文學界に現はれた

一大偉力である」と書いてゐるが、たとひそれに賛成しないとしても、彼の潑刺たる銳氣から流出する力には一種の魔力がある。この魔力は詩人にのみに屬する人生に對する飢渴そのものであるはいふまでもない。彼は慾望と野心との權化であつたといふことが出来るが、三十歳そこ／＼に成つた時既に彼は自分の慾望と野心の道が妨げられるやうに感じた。彼には自分の慾望と野心とが一種の呪であつて、彼は運命の皮肉に支配されて居ると感じた。所で、彼は驚くべき銳氣を振興して反逆し始めたのである。彼が反逆の對照となつたのは彼の生故郷の英國であるが、あるひはどの國に生れても、自分の國を呪つたかも知れない。自分を欺き奪ふものが化身して英國となつたと彼は見て居る。故に彼は英國に一撃を加へることは即ち天命であると信じた。彼の作品を通じて、英國人が了解して居る倫理觀念あるひは正教奉信オールドフェイスに對する攻撃の怒號を聞くことが出来る。彼は文學の力で英國に復讐したと信じてゐる。さうして近年に至るまで英國の大部分は彼を冒瀆漢である、放縱な狂人であるとして來た。

彼バイロンは冒瀆漢でも狂人でもない、彼は詩人である。詩人として詩的月桂冠を得よ

うとしたことは自然である。彼は文學的野心を永遠の上に實際たらしめようとて史劇をも
書い居るが、不幸にして失敗の作のみといへる。英詩界人多しといへども彼に匹敵する多
作家は少ない。月に劇一篇日に詩一つといった工合で筆を採つた。多作の結果で、彼の作
は同じ軌道を走るといつたやうなものが多く、人生に對する失望あるひは呪咀がその基調
をなしてゐる。詩人としての彼の苦痛は現實的であり、また彼の作は部分的では信實である
が、不思議にも作全體として見ると非現實のロマンスとなつて居る。人生の上でも彼は自
分では苦痛の體驗をして居るに拘はらず、全體が芝居がよりで人に實切の感を與へない。
彼は缺點の多い人間であつたが氣高い高尚な素質も多かつた、さうしてその尊い性質が
むさんにも破られくぢかれて居る。如何にもそれがいたはしい。彼は俳優として「虚偽の
自己」の爲め不自然ならしめて居るが、彼の半面には「信實の自己」が理想的に顯はれも
して居る。如何にもそれだけ見ると彼は尊い。彼には自己を憐れみ自己を高める偉大な力
があつて、それが純な感情にからみついて誠實な人間を作つて居る。彼の詩を知らうとす
るにはチャイルド・ハロルドの一篇を読むといふ。彼の天才が滾々と流れて「人生の河水」

を作つたのが即ちチャイルド・ハロルドである。これは彼の作品中で一番氣高いもので、
彼の個人的向上心の暗示が傳へられて居る、また人間の一生、人生の名譽と運命を如何に
彼が見て居るかゞ歌はれて居る。チャイルド・ハロルドの最後の一節には、彼自身の憂鬱と
一般人間の憂鬱が、ローマを背景として極めて雄辯に極めて熱情的に書出され、一讀人を
して襟を正さしめずに置かない。作品の名譽の上から見て、チャイルド・ハロルドに匹敵す
る彼の作はマンフレッドであらう。その劇では彼の理想的自己が悲劇を演じて居る。作品
としてははるかに陰氣であるが整頓して居る。チャイルド・ハロルド以上に個人的で、自
分の肖像を一層理想的に描いて居る。中心歸集が明瞭に用ひられてゐる言葉が簡單である
から人に感銘を與へる度も熱烈であるといへる。チャイルド・ハロルドはやゝ散漫であり、
形式否精神上哀歌の一種であるに反して、マンフレッドは熱烈で極めて劇的である、一言
でいふとバイロンといふ詩人が自分を理想化した總勘定である。

マンフレッドに顯はれてゐる個人格が「バイロニズム」といふ流行語を産出した。ヨー
ロッパの青年をバイロニズムのムードで動かした。ヨーロッパの青年がそれに動かされた

といふことには何の不思議がない。バイロニズムは何だ。いはく氣分に動く青年の力だ。いはく青年の熱烈な鋭氣と深刻な失望だ。ヨーロッパの青年ばかりでない、五十年乃至は七八十年前の青年で熱烈な鋭氣と深刻な失望の二つで支配されなかつたものがあつたであらうか。私はバイロニズムを青年の力として説明したが、青年の力が投げる憂鬱の影だといつた方がいゝ。バイロンの憂鬱は彼の力が投げる影に外ならない。彼は人生をのろつたり悲しんだりする、それは彼が人生を人より多く深く愛するからであるといへる。由來英國人は常識的國民で、その點では五百年前も百年前のバイロンの時代も同じである。また今日でも同様だといへる。劇的表現を嫌つて感傷的行動には興味を持たない冷やかな國民である。かういふ國民がバイロンを理解しバイロンに同情を持たないといふに何の不思議があらう。また詩人としてバイロンは英國詩人でなかつたといふことが出来る。彼は南方の國の詩人であつた。彼は地中海の詩人であつた。彼は地中海で詩の靈感と詩の題材を見つけた、また彼は一生を地中海の邊で過ごした。さうして作詩をした。

大陸のドイツ人或はスラブ乃至はロマンス・ブラッドを受けて居る歐洲の人間とは英國

人は感情の心理の上に、劇的情緒の上に非常な相違を持つてゐる。さうして前者を主としてバイロンは歌つたのであつて見れば、それに接した英人がどんなに驚きどんなに不思議に感じたといふことは容易に想像される。バイロンが提供した驚異と新奇とが原因となつて、たとひ同情がないとしても、澤山の讀者を引つけたといふことも容易に想像される。實際彼の作は非常に賣れたものである。今日でいふと所謂ベスト・セラーであつた。英國人は性質として歴史を好むといふ點を彼はねらつたともいふことが出来る。その歴史はリアリストの態度で、眞に迫る潑刺たる感激と突貫でもして来るやうな雄辯とを以て、パシヨンの場面を傳へたのであるから、歴史小説におけるスコット以上の成績を彼は舉げて居る。晩年になつて彼は段々圓熟し、家庭の不幸が不幸を追ひ、パシヨンの歴史を専ら暗黒の方面から眺めて居る。しかし人間の苦痛や失望を歌つた文字の色彩美の點から見ると、實に前代未聞であるばかりでなく將來とても第二のバイロンは産れないであらう。バイロンは烈しい、バイロンは温かい、バイロンは個人的である、バイロンは自己の暴露である、バイロンの感情は血の如く涌く。もとより英國人より歐大陸人の感賞を得るのもその所で

ある。英國人が見て以てバイロンの弱點としたものを、歐大陸人は彼の長所として眺める。英國人が見て以てバイロンの不愉快不奇怪だと認めたものを、歐大陸人は大詩人の力だと賞讃する。歐大陸人に對するバイロンは偉大な人間の權化であつて、傳統の古びた神に向ひまた習慣の苔蒸むした殿堂に反旗を擧げた人生の大勇者であつたのである。彼は詩人として文字の上で歌つたものを實際生活の上で實現したといふ點でも歐大陸人の興味を引いた。彼は感情の犠牲であつたとしても、彼はまた「自由」の使徒であつた。この自由の宣傳位ヨーロッパ全體を通じて動かしたものはない。さうしてバイロンにおいてはその宣傳を文字の上においてのみ止まらしめずに、實行の上で嚴肅ならしめて居る。彼の死は實にフリードムの殉難者であつた。

人格として彼を見ると、人をして文藝復興時代の貴族を想像させる。彼は法律を無視しないまでも輕視する、彼は大膽無分別である、彼は熱烈に我意を張る。ある批評家が書いてゐるやうに、彼は晩年になるとイタリアの墮落貴族を想像させる。彼は時代の倫理觀念を否定する、彼は自分勝手に嘲笑的である。彼を主人公とする劇の最後の幕は「ギリシヤ

に於ける死」で落ちたが、彼は死の力で自分の肩からすべり落ちつゝあつた名譽を取返したかの感がある。しかし文學的に批判すると、確に天才の自殺といはねばならない。無理に死んで自分の詩の生命を斷ち切つて居る。

彼の力は尊い、彼の熱情は尊い、彼は偉人の資格をそなへて居る。たとへると彼は貴重な壺か瓶のやうなもので時の暗礁にかゝつて眞二つに破れたやうなものだ。彼は幼少時代から青年の時代へ掛けて學校でギリシヤ語を學び、古い過去の文藝にあこがれた、彼は學生の熱心で幾多のギリシヤ詩人の作を英譯もして居る。その後目のあたりギリシヤの風物に接して、學生時代の憧憬が信仰と一變した。「ギリシヤに自由を與へねばならない」と決心するに至つた。アドリアチックの海岸やリュカデアンの海や永遠に青い、紫色に靜かな瀕を見下すパナサスの山には詩神が雲に乗つて遊んで居る。彼はこゝへ來て、過去に對する熱情は再び鋭氣を以て復活するを感じ、荒涼たるギリシヤの地中に眠れる偉大な力を彼は詩の力で現在に呼起さうとした。さうして文藝におけるギリシヤの復活は、實際的政治上の復活となるに至つたのである。英國は依然として彼を拒絶してウエストミンスターに

一ニツチを與へない。しかしギリシヤそのものがバイロンに對する眞實の殿堂である。彼はこれ以上のメモリーを要せぬであらう。實際彼を永久不死ならしめる有らゆるものは地中海に屬して居る。地中海の鋸の齒のやうに出たり入つたりしてゐる海岸や、青々した樹木で被はれた寂寥な島や雪で白い並立した諸峰を背景としたバイロンは永久に亡びない。彼の名聲は單に英國詩人としてばかりでない。彼は彼の最後の文字に書いてゐるやうに、ギリシヤの地に眠ることをどんなに喜んだであらう。

英國に詩人は多いけれども實際に大陸的である詩人は少い、いひ替ると世界的詩人は英國に少い、バイロンの如きはこの數の少い中で一番偉大な英國詩人であつて、單に英詩人として取扱ふべきでないことはいふまでもない。彼は人格の上でもまた天才の上でも、英國から追放された一流人である。英國は「陰鬱の島」といはれてゐる。それは一種の田舎島の意味だともとられる。バイロンはこの陰鬱の島から逃れだして、詩の感興を地中海の温かい情緒的でロマンチックな雰圍氣に求めた詩人である。彼の想像と題材はジブラルターからゴルドン・ホーンに渡つてゐる、彼の追憶はカルブからスタムポールに足跡つけられて

ゐる。彼は詩にホルトガルやスペインやアルバニアやギリシヤを歌ひ始めて、イタリアを取扱ふようになつた時には彼は既に壯年者の威風を文學の上に傳へて居る。最初彼が故國を離れて地中海の風物に接した時、リスボンを経て南方に入りこんだ。この時に、この瞬間に、彼の詩は俄然として眼を覺ましたのである。彼は終生この愉快で尊い最初の印象を忘れることが出来なかつた。北方生れの彼の眼に映じた地中海の美が、どんなに力強いものであつたかは容易に想像することが出来る。彼の血を冷却せしめるやうな英國の道徳から逃れ、始めて自由の天地に放浪することが出来た時に、彼が體驗した心の鼓舞や飛躍は容易に想像することが出来る。南方の美は海の美であることはいふまでもない。また海の美は自由そのものゝ美であることはいふまでもない。彼は南方を愛したが故に海を愛した、海を愛したが故に自由を愛したといふことにもなる。

彼が最初の放浪生活に接した自然や野蠻で何等の檢束を知らない人生や寂寞ではあるが懐しい歴史的古跡は皆彼の奇傳的想像を培養するものならざるはなかつた。彼が海の上に、山のふもとで、あるひは山間のテント生活に實行し得た冒險的自由生活は彼をして赤裸な

らしめるに至つた。彼は英國を離れて始めて完全に徹底的に生きることが出来たのである。しかし彼は英國人である、如何に自國人を嫌つても英國人である。英國人が自然の放浪者たることが出来ないやうに、彼も生れながらの放浪者たることが出来なかつた。彼は耳に荒野の叫ぶ招喚の聲を聞くことが出来なかつたといふのは、彼は放浪をスポーツの一種と思つて居つたかの感がある。それにしても、彼はこの放浪から詩を發見した、否な自由を發見した、彼が發見した詩によつて名譽を得、彼が發見した自由の爲めに終に生命を失ふに至つたのである。

英國の文壇はバイロンに澤山負ふ所があるが、東方の輸入はバイロンが仕遂げた仕事の中の大きなものゝ一つであらう。東方といつてもその當時ではアラビヤやベルシヤ位に限られて居ることはいふまでもない。バイロンばかりでない、この東方輸入に盡力した文學者にムーアもある、ソーセイもある、コラリツヂもあることを忘れてはならない。しかしバイロンは其中で一番すぐれた詩人で、東方の濃厚な色彩をメロドラマ的な現實派でいつて居る。現實主義といつても今日のそれとは違つて、外面的な陰影を壯嚴な句調で傳へた

に止つて居る。故に今日の批評からいふと、バイロンは必ずしも第一流の文學者でないかも知れない。彼には物の心理を徹底させる洞察力を欠いた、精神的現象を人に暗示する眞實の發明力を欠いた。彼は事實の範圍から一步も踏み出すことが出来なかつたかの感がある。詳細な批評家の説を信ずると、彼はしばしば剽竊や焼直しをして居るさうである。それに關するたしか實例があるといふことであるが、私はそれを論ずる何等の用意を持たない。彼は東方の史話や傳奇を取扱ふに當つても、南方人に屬する感情や想像を以てして居るやうであるが、出てくる人物は大膽で熱情的である、また背景とするランドスケープはことごとく羅曼的であるから讀者の興味をそゝらすには止まない。丁度スコットが小説の舞臺としてハイランドを發見したと同様に、バイロンも東方に自分の活動地を開拓したものである。

想像から實行へたゞ一步である。文藝におけるギリシヤの憧憬は實際におけるギリシヤ人との接觸となり、この接觸は彼をその國の實際政治に卷込ませるに至つた。彼は喜んで自分の運命を迎へ、更に一層喜んで自由の爲めに犠牲と成つた。彼はこの實際的行動で以

て英國の保守主義を罵倒するに足ると思つたかも知れない。彼の傳統と束縛に對する反抗は如何に強烈なものであつたことは想像される。彼は詩人として天馬空を走るの概があつた如く、實際の人間としても一種の英雄たるを失はなかつた。

最後に彼を自然の歎美者として考へて見る。私は彼は眞實のラバーとして自然を理解した詩人とは思はない。詩の文字の上で、彼は人間より自然を一層愛すると歌つては居るが、元來彼は貴族出の人として自然に社交的の半面をそなへてゐた。彼は孤獨の境地を自然の中より群集の中に發見した詩人である。「自分には山嶽も感情を持つて居る」と彼は歌つて居るが、それもウオヅウオウスのやうに萬有神教的の眼から見た自然觀でない。またシエリーのやうに神話を理想化した自然觀でもない。彼の自然觀は澤山の英詩人中で一番物質的のものである。弱點としては彼の自然觀はいさゝか不純でありまた混亂の情が織込められてゐる。その長所としては彼の自然觀は強烈であつて男性的意識に富んでゐるといふことが出来る。自然詩人としてもとより有數の詩人中の一人であるには相違ないが、自身は私の性質が彼に最大敬意を拂はしめない。三十年前には私はバイロン宗の信者であ

つたこともあつた。殊に私の保護者であつた北米の詩人ミラーはバイロン張りの詩人であつたから、彼から如何にバイロンの大詩人であるかを聞かされたものであつた。ミラーもバイロンのやうにセンチメントの詩人であり、人格としてひとしく我儘者で自我中心主義の人物であつた。エゴイズムは詩人の力である。エゴイズムが洗練されて「理想的自己」を築いた時に詩人の壯嚴さが顯れる。私もミラーと一緒に生活した時には、若し英國へ渡つたならばバイロンの古跡を訪問するであらうと思つてゐたが、その後五六年経て、いよ／＼足を英國へ踏み入れた時には既に私のバイロン熱は冷却して、キーツ歎美に移りキーツからヴェルレーヌに移動しつゝあつたのである。それ以來私はバイロンを讀んだことがない。今日でもさう讀みたいとは思はない。

日光論

故國の理解ない年若い時に外國生活に入つた僕は、彼地で外國人から日本の自然や人生に顯はれた美をいろ／＼と聞かされた。これを僕に聞かせた人のなかには會遊の地に對する嘆美と感激を誇張するといふことを義務だと思つたものもあつた。(この種の無批判からどんなに日本は迷惑したか知れない)。又自國に向つての不平等を語るに當つて、便利で好都合な舞臺裝飾の一種と日本を取扱つたものもあつた。さういふ場合に僕はいつも四分の得意と六分の恥辱を感じた——それは日本人として自分の方から故國の美を語ることが出来なかつたからである。

僕は紐育で(もうかれこれ二十年前のことだが)ある著名な美術家からさん／＼日光の美を聞かされた。彼の精緻で鋭利なる感覺は日光に於ける雨の變化から深い印象を受けた。——「米國には三百六十五種も玉子の料理法があるといはれて居るが、確に日光の雨に

はそれに匹敵するだけの變化がある」と彼は語つた。彼は日本の自然は描くに一番六ヶ敷い、言ひ換へると自分の腕は未熟だといふ自覺を得る爲め日本へ行つたやうなものだとも語つた。(然し彼は米國畫界の首席を争ふことが出来る畫家であつた。)彼はしば／＼追憶的情調から僕に語つた。「大谷川の向ふ岸に澤山の地藏菩薩が居た。僕はそのうちでも特に親地藏といはれた一體を愛した。僕は謙讓の態度でそれをスケッチした。居ならんだ地藏菩薩の後ろに、恰も蜃氣樓でもあるかの様に見えたり隠れたりする山は男體山である、——この位詩的な場所は恐らく二箇所とはあるまい。僕はこれ等の地藏が經た過去の歴史を、身體一面に生えて居る青い苔や巡禮の人々が見舞つてはくつ付けて行く穢い紙の片から想像することが出来た。一度僕は中禪寺から下つて其等の側を通過する時急激な雨と風に出遇つた。僕同様に其等の地藏菩薩も全身びしょ濡れであつた。僕は自分のことより彼等の身の上を憐んだ、——僕は空虚な涙の感傷家でない、といふことは君のよく知つて居る所だらう。僕は今日に至るも雨に撃たれた地藏菩薩の光景を忘れることが出来ない。然しそれは畫題として良いものゝ一つであつた。僕は日光を思ふと直ぐ眼前に雨が浮きだして

来る、又雨中の地蔵が顯はれて来る——恐らく今頃も日光では定めし雨が降つて居るかも知れない。雨の本場の日光で數ヶ月を暮し乍ら、満足する「一枚の雨」さへ描くことが出来なかつたことを僕は恥づる。日本の雨は描きにくい！それにつけても「雨の廣重」は偉大な藝術家であつた。』

十三年目に歸朝する途次、僕は一二週間昔なじみの桑港で過ごした。その時僕は或る新聞の一記者の訪問を受けた。この記者が發した言葉で僕は驚かされ惑はされ又欺かれたかの感があつた。彼はそれを『崇高な無學』から發したか、或はまた『壯大な皮肉』から發したかは今でも分らないが、——僕の歸朝の目的は何だといふ彼の質問に對して、『涅槃』The Nirvana』を得んが爲めに米國を去ると返答したところ、『はあ、さうですか、だが……失禮ですが涅槃には時期が遅かないでせうか』と彼はいつて半ば滑稽的な微笑を僕に與へた。『涅槃には時期が遅い』といつたこの無名の新聞記者は果して『涅槃』を何物と心得たであらうか——猿か熊とでも思つて居たかも知れない。然し僕の頭にはその言葉が異様の意味を齎らして痛切に響いた。

僕は日本へ歸ると前記の新聞記者の言葉通りに、涅槃には時期が餘りに遅いといふことを知つた。實際紐育や倫敦でそれが發見されないに、どうして日光へ行つたからとて發見されようぞ。

然し僕は歸朝以來しばし日光へ出掛けた、——勿論、涅槃の聖境を發見しようといふ大きな希望が僕にあつたので無い。だが紐育で日光の美を語つた僕の友人畫家の言葉が如何に眞實であるかを調査して見ようといふ位の好奇心は無いでもなかつた。僕は夏にも又秋にも日光を見舞つた。然し僕は最初、初夏の候に其處を訪問した時の印象をどうして忘れることが出来よう。

上野の一番を取る積りで小石川の植物園近くの家(僕の久堅町時代は可なりな昔物語だ)を出たのは空がまだ暗い時であつた。家の門を出るとさつと僕の鼻を突いた青葉の香氣——それに遠くに聞える蛙の聲……僕は今でもこの青葉の香氣と蛙の聲を想像すると、直ぐ時代が十四五年も逆戻りして、新歸朝者の新鮮な氣分で日本の自然を味ふことが出来るやうに感ずる。僕はその時宛も潮のやうに漲る旺盛な赤い血の五月の自然を祝福した、——

それと同時に自分の血氣壯んな脈搏に對しても祝福した。汽車が上野を出てもの一時間もたつと右手に見る一面の青々した麥畑、それを背景附けたり又輪廓附ける茂つた青葉の樹木……見よ遠方の樹木の上から幽靈のやうに頭を持上げた白い静寂な富士の尖峯！僕はこの光景に接して感激的熱涙に暮れたといつても幾年間でも故國の自然から遠ざかつた經驗のある人ならば決してそれを誇張だとは思ふまい。又新歸朝者であつた僕が見るもの聞くもの悉く感激の種とした態度を不自然だと誰がいふことが出来ようぞ。

僕は日光へ著いて坂道を歩いて神橋の方へ進んだ。神橋へ近づくとまともに向けた僕の顔を斜に敲いた沛然たる驟雨、——見ると太い眞直な銀の雨だ。僕はこれが僕の友人畫家が談つた變化極まりない日光の雨の一つだと思つた。又僕はこれは一立齋廣重が唐崎夜雨に使つた銀色の雨だなとも思つた。橋向ふの日光山の麓は煙のやうな灰色が、つた白い霧の廣い帯を巻いて手に取る事が出来る位近くも感ぜられるが、又昨夜見た夢のやうにも遠く感ぜられた。この時侯の胸に浮んだのは、これはまるで狩野派畫家が得意に描く蓬萊山の景だといふ感じであつた。何だか餘り神聖に思はれて人間の足跡を許さないやうに考

へられた。其邊には乳汁の如くどろつとした幻想が重なり合つた樹木に大きな蜘蛛の巢のやうに引懸つて、千年も萬年も年取つた靈魂の痛みや喜びが茫々漠々たる歌の姿となつて震へても居るやうな心持を感じたが爲め、僕は直に橋を渡らなかつた。

僕は神橋の脇のホテルに入つた。

その晩僕はホテルの應接室で食後の喫煙を味ひ乍ら、古臭い雑誌をひつくり返して居ると、不圖アーピングで有名なキャツキル山のホテルにも覆面でピストル差向けて居る表紙の繪の探偵小話以外に、一冊の文學書が無かつたのを見て僕は一方ならず憤慨したことがあつたことを思出した——『一體晋に名高い遊園地のホテルのライブラリー位時世に後れたものは無い』と叫んだ。手に持つた古雑誌を側に捨て、足を思ふ存分のばして欠伸して居ると、僕に接近する一西洋人があつた。この人は僕がホテルへ着くと間もなく知つた人で、聞く所に依ると彼は市俄古で著名な建築師であるさうであつた。僕は彼とこんな談話を交換した。

僕、「金と朱塗で野蠻に見える位にてかくした日光の莊殿は人に想像の餘地を與へな

い、人に憂愁をもてあそぶことを許さない、——この積極的な事實に對して、訪問者はたゞ二つの言葉を持つのみだ……肯定するか否定するかの一つあるのみだ。澤山おいしいものを腹に詰め、財布も河豚のやうに脹らんだいゝ氣分の樂天論者には、この日光の暴君的美々しい富もさう壓制的には映すまい……』

西洋人「少くも西洋料理の上では「おいしいもの」の言葉を引込めて貰ひたい、——何處のホテルが我慢の出来る程度の料理でさへも供給するだらうか。日本に於ける西洋料理は紐育の舞臺で見る日本劇同様に、世界最悪産物の標本の一たるを失はない。國を出る時に河豚のやうに脹らんで居た財布も物價の高い日本をうろつくと直に罐詰の鯛のやうに瘦せて仕舞ふ。然し……樂天家たることは漫遊客の義務でもあり又特權である。僕は樂天家の誇をどこまでも保存する、——そして樂天主義の肯定でこの日光の永遠の美を、人間努力の終局の偉業として歌ひたい。』

僕「僕は君の樂天主義に對して尊敬の意を表する……僕自身も外國生活の上では立派な樂天家であつた。然るに僕は悲觀論者として故國に歸つた。悲觀論者の一大弱點は要求な

き場合に於ても批評を弄せんとすることである——僕はそれをよく知つて居る。又悲觀論者の得意とする所は、物質的表現を一足飛びに超絶して精神的交通の靈域に入ることである。僕の悲觀主義はこの日光を藝術の悲しむべきディレッツタンチムと呼び、この位不幸な藝術の消費はあるまいと僕をして叫ばしめるかも知れない。然し僕は庭園としての日光が、大規模の庭園設計に堪へ得る日本人の實力を立派に證據立て居ることを喜ぶ。人間の仕事が如何に野蠻的壯麗を極めて寧ろ外面的表現に即したのも、大自然の温かい呼吸に接すると不思議に和げられ辭かにせられたる事實を日光で見ると僕は喜ぶ——自然と建築の藝術が善身な友人關係に置かれて、この日光といふ完全な創作が顯はれたのを見て、だれが愉快に思はないであらうか。』

西洋人「西洋では人間が自然を傷付け蠶食し聽ては征服して仕舞はうとする點からでも、僕は西洋人は野蠻人だといふ批評を是認しなければならぬと思ふ。自然の征服を何うして文明といふことが出来よう——實に文明の程度は自然に對する尊敬の有無で律せねばならぬと思ふ。今日の日本はいざ知らず、三百年前の日本は文明國であつた。その證據は

この日光にある。だれでも東照宮御廟の内外に注意の眼を放つと、御造營前には如何に澤山の老杉が茂つて居つたかは想像するに難からぬ。其等の木を一本々々、間違つた藝術的行爲をせぬように殆んど恐怖に近い細心な研究を拂つて取り外し、此處に殿堂を建て、其處に參道を通じたのである。參道が鈍角に折れたりして却て神韻幽情を誘致するの感あるを喜ぶと同時に、僕はこの曲つた參道は設計者が如何に多くの尊敬を其處に存在せる樹木の位置に拂つたかの證據と見ることが出来ると思ふ。又境内の均齊を破つてまでも、高く大きく生長せる樹木を重要視した事情を見ると、僕はいつも其設計者が抱いた自然崇拜の偉大なものであつたことを感ぜざる譯に行かない。見給へ、殿堂の間に點々散在して居る老杉——殊に陽明門の前に立つて居る大きな杉の木は、確に殿堂そのものと等しき價值を持つて居るでは無いか？、僕の語る言葉は決して無責任な誇張で無い。だれが松平正綱に對して偉人の敬語を否むことが出来るか、——だれが彼が植ゑた日光街道の杉並木の莊嚴なる價值は陽明門のそれに匹敵すべきもので無いといふことが出来るか。』

僕、「僕は日光街道の杉並木を陽明門と同價値に見る君の大卓見に敬意を表する。日光御

廟の美は入口の仁王門から始まるので無い、又仁王門に對して左手に起つて居る高さ十丈五尺の五重塔からも始まるので無い。更に又元和四年黒田筑前守長政の寄進に係る日本第一の石の大鳥居柱徑三尺五寸高二丈八尺九寸からも始まるので無い、然らば何處から始まるか、——實に日光街道の杉並木から始まるのである。日光御廟といふ大音楽は天を拂ふ高い杉並木の前奏で始まるのである。その壯大な美觀を理解しないものは決して日光の美を完全に見たものとは云へない。汽車で日光町の麓に降ろされ、何等用意なくして廟内に踏込むものが、どうして眞實なる巡禮者だといへよう。若し眞に日光の美を天下に紹介しようとするならば、僕は汽車を先づ以て破壊してかゝらねばならぬと敢へていひたい、——日光巡禮は日光街道の杉並木の最初の本から始めねばならぬ。』

西洋人、「僕は建築師として己に二週間此處に滞在して居る、而して日光建築を側面的に研究して居るものである。面積の上から見ると、五重塔や廻廊の東西に當る神庫なども一切計算に入れて僅々八百二十五坪である。日本の建築家から聞くと、それは淺草の觀音堂の二倍で、若しそれを東京停車場に比較すると其三分の一、更にそれを奈良の大佛殿に比

較しても遙に少し小さいさうである。かういふ建坪の小區域に神祕的建築と佛寺的建築とが確定した組織の上で統一されて巧妙に居並んで居る——この藝術的奇蹟を行つた昔の設計者の力は實に偉大な者であつた。見給へ、此處に鐘樓があつて、それに相對する經藏がある。そして又本地堂藥師塔五重塔仁王門などいふ佛寺的建築が作られて居る。然るに一方に石の鳥居神庫水盤舍拜殿本殿などいふ神祕的建築が作られて居ても、決して混淆の醜態を暴露した低級の建築藝術で無いのである。重ねていふが昔の設計者の力は實に偉大なものであつた。彼等の偉大なる力は、有らゆるその他の日本藝術に於けるが如く外形的制限が精神上の充實を阻害するもので無つた點に懸つて居る。これ等の小建築に何たる充實した人間の努力が入れられて居るであらう。それが最高頂點に達した時に音に名高い陽明門が顯はれたのである。僅々八坪餘といふ小建築の陽明門に何たる東洋建築の精髓が含まれて居るだらう。」

僕、「今日秋元家に傳つて居る御造營目錄を土臺にして勘定した人の語る所に依ると、日光諸廟の總工費が大略二千萬、——さうすると平均一坪が二萬四千五百圓かゝつたことに

なる。かういふ巨額な一坪の建築費は、少くも日本に於て前代未聞の出來事であつた。殊に陽明門の一坪は十五萬圓を要したといふことを聞くと誰でも驚かざるを得まい。僕無學にして西洋の如何なる建築が最高工費を要したものであるかを知らないが、恐らくこの陽明門はその點で優に第一に推されべきものであらうと想像する。萬代不易のものを作るといつた徳川三代將軍の意氣込も容易に了解することが出来る。」

西洋人、「今建築の技工上から見ると……仁王門前の五重塔は仁王門の右手から覗いて見える下神庫の屋根の側面と斜に對照して、破格な均齊の一方法を案出して普通の建築技工をひそかに罵るの感がある。更に又門に入つて、右にある三箇の神庫と左にある厩舎とが左右均齊を破らんとする場合、五重塔の姿が門前から應援して力負けして居る左手の建築に力を添へ、立派に飛將軍の役目を解除して居る。水盤舎を左に見て北に折れて歩むと右手の神庫に對する左に輪藏がある。それから石の段々を上ると正確な左右均齊が此處から始つて居る、——左に鼓樓、右に鐘樓、正面の陽明門を左右に飾る廻廊がある。廻廊の一と間毎に極彩色に塗られ異つた意匠の花鳥其他の透し彫——これは決して陽明門を辱かし

めない日光建築彫刻の秀でたものである。僕はいつも羽毛など一本々々正直に細かく彩色してある全部丸彫の透彫の前に立つたばに、さういふ藝術品を無慈悲な雨露に曝すのは如何にも無鐵砲だと思はざるを得ない。陽明門に立つて顔をまともに向けると唐門がある、そして左右に神輿舎と神樂殿。唐門の屋根は所謂四方唐破風で極めて奇抜な曲線を巧妙に適用して居る。僕は日本の建築家がこれを日光建築中一番振つたものゝ一とする説に賛成せざるを得ない。門の扉の上に欄間があつて支那史傳中の物が彫刻してある、これは陽明門に於ける人爲彫刻と共に珍奇な試みといつてよからう。唐門の左右からも陽明門の廻廊と並行して廻廊が出て居る。この廻廊は東手に長く延びて居る、そして其處に人を異つた場所に誘ふといふ暗示がすらくと讀まれる、——我々はその廻廊に添つて坂下門をくぐると奥の院で家康公安眠の御所へと小山を上つて行くのである。勿論最後の本殿が如何にも嚴肅な左右均齊を守つた建築であるといふことはいふまでも無い。僕は世界各地に存在せる宗教的建築の多數を見て居るが、この日光建築位各部が擊つて一丸となり、極めて完全中心歸趨の妙諦を具現して居るものが他にあることを僕は知らない。規模の小なるこ

とは決して内面的表現の小なることを意味しない、——眞實な意味に於て日光御廟は大建築であるといつても差支ない。僕はそれが優に倫敦のウエストミンスター或はセントポール更に或は巴里のノートルダムの諸伽藍に匹敵し得るを信じて疑はない。』

僕「僕は建築上の智識を持たぬが、日光研究者の發表した文章を讀んで各堂宇の變化の多いのに驚いて居る。八脚門で切妻造の屋根を持つて仁王門に近い三箇の神庫はいづれも同形の校倉造だが、中の神庫だけは入母屋造で他神庫の切妻造と異つた趣を出して居る。既舎は白木造、形は粗造で切妻の曲線形の破風の長さが左右異つて居る。木造の既舎に對する石の柱の水盤舎、その屋根が唐破風造で前後に大唐破風が附いて居る。方錐形で其頂上に寶頂といふ裝飾が載つて居る所謂重層寶形造の輪藏に等しく重層で下袴腰に入母屋造の鼓樓と鐘樓が石段の上と下とに立つて居る。それから陽明門であるが、これは三門樓門で入母屋四方軒唐破風の屋根といふ極めて手の込んだ建築である。唐門は四方唐破風造といふもので普通のそれで無い。神社建築中最も複雑な形と許されて居る權現造は拜殿から本殿に至る一廓で全く完璧に代表せられて居る。斯く建物の形式に澤山の變化はあるが、

決して散漫放恣に流れたものでないことはいふまでも無い。そしてそれ等の流動した生氣ある多種多様の建築に添った獨創的裝飾が無遠慮に採用されて居る。日光研究家たる建築技師の語る所に依ると、苟も建築に適用され得る東洋の工藝は悉く應用し盡されて居るさうだ、——土臺から屋根に至るまで全部色でつゝまれた色の建築である以上、その調和を破らない限り傳統的因襲に捕はれない、杓子定規を痛快に罵つた斬新な意匠が自由に試みられて居るさうだ。大正四年に南葵文庫で開かれた講演會で伊東博士がせられた講演「美術より觀たる日光」のなかにかういふことも語つて居られる、「陽明門の柱には屈輪といつて一種の曲線形の渦紋が一杯に彫つてある。その中に於て所々に圓い輪廓を作つてその中に虎を彫つたりいろ／＼の動物等が彫刻してあります。斯ういふやうな事は随分思ひ切つたやり方でありまして未だ曾つて斯んな試みをした人は古今東西にありません。一般に柱といふものは上から荷を受るものでありますから、その裝飾も何等か力學上合理的であるかの如き手法を選ぶものであります。例へば西洋あたりでは柱に豎に筋を入れて見ましたり、或は日本でも背は柱の表面に所々に帯のやうなものを施し、その中に裝飾を施したり

して居る。要するに柱の性質から觀て、それと相背かない考でやつて居る。柱の表面に豎に筋を引けば力の方向を并行に筋が通つて居るといふ意味があつて甚だ合理的である。又柱の周圍に帯の様なものを捲いた形は柱を締附けてはじけないやうにするといふ意味が見へて十分理屈が附いて居る。然るにこの屈輪に至つては何うも理屈の附けやうがない。しかし乍ら日光建築の方針は、斯くの如き理屈は要らないといふ主意らしい。建築の意匠は理屈詰では行かぬ。常法とか歴史的因襲とかいふものには囚はれない方が宜いといふ主意らしいのであります。……漆にもいろ／＼種類がありまして最も鄭重な所は本地から仕上まで三十回以上も塗つて居るものがあります。又漆の色にも蠟色といふ黒いものがあり、或は**髹紅**といふくすんだ赤い色もあります。又朱と**髹紅**と合せたものがあり。純朱塗もあります。漆の上は或は蒔繪を施し、或は色彩を施して居る。蒔繪にも高蒔繪もあり、平蒔繪もあり梨地もある。それから彩色にも色々種類がある。或は極彩色といふのがあり又生彩色といふのがある。唐繪彩色といふのもあれば密陀彩色もある。又金箔は夥だしく使はれて居る。次に金具であります、是も非常な種類がありまして、上等な物になると非常

に厚い銅の板に紋様を彫刻し、之に消鍍金といふ一種の鍍金をしてあるものがある。箔鍍金といつて金箔を水銀を以て置いたものがある。又漆箔といつて金箔を漆を以て置いたものもある。或は其金具に七寶を入れたり或は其金具に透彫をしてあるものもある。……苟も彫刻の施し得べきものには彫刻が附いて居ります。柱の上でも軒の廻りでも、羽目の中にも妻飾りにも彫刻が一杯附いて居ります。此彫刻は美しいには相違ないが、世間で非常に譽めて居る程の價值があるや否やは疑問であります。當時彫刻家は優遇されて居らなかつた。繪師の方は優遇されて居りましたが、彫刻師の方は彫物大工として大棟梁甲良豊後の手に屬して居りまして、一日に七升五合といふ給料であつた。平大工は六升五合、木挽大工は四升五合といふ扶持でありました。彫刻師の仕事も多くは狩野家の下繪に由つたもので、彫刻として特に傑出したといふ程のものではないやうです。」

西洋人、僕も日本人の口から澤山有名な「眠り猫」のことを聞かされたが、一向に感服しないのは我々西洋人ばかりではあるまい。若し御廟の彫刻中で眞實なる實行的價值のあるものがあるとせば、之は厩舎に附いて居る三匹の猿の外でないだらう——この作品は確

に優秀なものだといふことが出来るだらう。」

僕、「彫刻に於てばかりで無い。その當時の繪所領であつた狩野探幽が監督の下で描かしたり、又自分自身の筆であると傳へられて居る繪畫に至つても、決して眞實な藝術と受取れない、——兎に角藝術としてさう大きな價值のあるもので無い。」

西洋人、「部分々に研究して駄目を出し始めたならば限りあるまい。然し日光御廟は全體を觀賞せねばならぬ。陽明門の柱は白くて斗拱が黒いので色の變化が餘りに急激で不調和だといふ批評はある。——又その他に於てもいかゞはしい點が部分的に澤山あるに相違ないが、大體に於て黒と白と金と群青と綠青と白綠と朱などの顔料の配色は可なり成功して居る。色の建築としてこれに比較すべきものが世界何處にあるであらうか。殊にまた樹木との調和を主とした全體の設計の上から見ると、殆んど完全に近い大藝術であるといつても差支はあるまい。」

僕、「君は寶物のなかにある大棟梁甲良豊後宗廣が寛永御造營の仕事始めの時使つたといふ單純な大工道具を見たか。斯ういふ原始的な道具からこの壯麗極まる殿堂が産れたとい

ふことを考へると、實にはや奇蹟だと思はれない。』

西洋人、『それは一本の筆や小さいインキ壺から沙翁の劇が書かれたと同じことだ。』

僕、『僕は最初は悲觀論者で日光御廟の美に對して皮肉な反抗さへ主張したい希望であつたが、君との談話を進めて居る間に知らず／＼樂天家氣分に變化して、その美の永遠無終を嘆美するやうな結果となつて仕舞つた。僕の變節を君は笑ふだらうか。』

西洋人、『日光に對する君の變節は結構だ、——だが耐久的永遠無終の美といふ點から日光を科學的に論ずると随分議論は有らう。僕は日光の建築の永遠性を疑ふ——即ち耐久性に乏しいといふ日本建築家の説を是認する。又事實がその證明もして居る。幕府に於ても大略二十年目毎に修繕を遣つて來たさうだ。一見堅牢に見へるが漆は永遠性に乏しい、——十幾年も過ぎるとはやその色澤を失ひ又剝落もする。自然に濕氣を帯びた内部の木材は案外早く腐るので、如何に外部の銅鐵が堅牢でも如何ともすることが出來ない。元來斯かる壯麗無比な建築を雨露に曝らすといふことが大膽無謀だ。然し其處が徳川初期に於ける藝術心が雄大自由な活氣に燃えて居た所以であらう。』

僕、『霸氣縦横で豪放壯麗な桃山時代の藝術を繼續した徳川初期だ。政治上の變化のやうに僅に十數年間にさう藝術の心が變る筈がない——故にこの日光藝術も桃山時代の延長として見るのが正當であらう。ある意味からいふと徳川三代將軍は桃山藝術を更に一層進歩せしめたものといへる。勿論餘りに自由に新意匠や非傳統的行爲を是認したが爲め、自然に時には混亂に陥り又多くの場合には藝術のホモゼネチーを失ふ結果ともなつた。』

西洋人、『如何なる藝術の表現にも長所もあれば短所もある。その長所を見て最初の計畫がどの點まで遂行されたかを知らねばならぬ。同情心が無くてどうして藝術が了解されるものか。』

僕、『僕等は餘り長く日光を語つた。——此處で僕等の談話を終結せしめよう。そして日光のため祝杯を挙げ様ぢやないか。』

西洋人、『賛成！』

僕、『ポイーさん、ちよと此處へ。』

西洋人、『君何を飲むて？ ポイーさん、酒の目録持つて來て呉れ給へ。』

死者に對して殿堂を(粗末なものでも)又立派なものでも作るといふことは日本人元來の眞實な思想で無い、——死すると木や山や水や風や花や鹿や鴉や狐や狼や熊やなどゝ等しく自然の大きな親切な影のうちに包まれて仕舞ふものと信ずることは、必ずしも無邪氣な手輕な原始的信念とのみ云へまい。然しこの日光のやうな御廟を建設するといふことは、物質的實在をのみ是認した結果、單に灰色の原素に歸ることを恐れ死後も何かの隠れ家を望んだ十七世紀の武士の仕事として容易に了解される、勿論彼等の思想が外面的佛教に服從したのにも起原して居るのはいふまでも無い。ところで僕は、今日の東京が(少くも表面的には)倫敦や紐育の一部である、更にもつと適切にいふと紐育や倫敦は日本の東京から始まつて居ると同じ意味で、印度と支那の文明はずつと延びて日本の日光で最後の完成をなしたといふ事も出來やう。(我々日本人には絶對的獨立した歴史の頁が果して幾枚あるであらうか?)

徳川家康は元和二年正月二十一日、駿府から少し離れた田中といふ場所へ鷹狩に出掛けその晩から食傷のため急病に罹つた。そして彼は四月十七日に薨去するに至つた。薨去前

彼は本光國師崇傳と南禪寺金地院の僧と天海僧正と股肱の臣本多正純とを召して遺言をした。「自分の死んだ時には身體——遺骸は久能山に納めて神に齋ふ。之れが第一。葬式は増上寺で行へ。それが第二。三河の大樹寺に位牌を立てよ。之れが第三。一週忌が過ぎたらば日光山に小さい堂を立て、勸請すべし、關東八州の鎮守とならう。之れが第四。」それから「京都にも南禪寺の金地院に於て小さい堂を營み所司代その他のものが參拜の便にすべし。それが第五」の遺言も附加へられた。然るに家康は死ぬついで前日の十六日に京都吉田の神龍院の僧梵舜を喚んで禪に齋ふ法式を質問した。——そして彼の神社を吉田流の神道に依つて營むといふことになつて、梵舜が萬事その事を掌ることになり、追つては朝廷の方に神號を奏請し、吉田の神主を喚び出して遷宮の式に行ふことゝ決した。所が天海僧正が之れに對して異議を申立てた。「自分は家康公からかね／＼特別の遺言を受けて居る。公は其生前に、自分は天台宗で傳へられて居る山王一實神道に従つて權現として神に祀られたいといふ遺言であつた——即ち山王一實神道に従つて權現として祀られたいといふ御希望であつた。然るに今吉田流に依つて行はれると公の遺言の始末は何うする。」可なりの激

論の結果、天海僧正が勝つて朝廷をして「東照宮大権現」の神號を降さしめた。書物を讀むと家康は宗教問題では極めて公平無私であつたと賞讃して居るが、彼は如何なる宗派にも何等の執着を持つて居らず、君や僕やの日本人同様、無頓著であつたといふ方が眞實に近いであらうと僕自身は思つて居る。宗派論は外面的形式以上のもので無いから、どうでもよい位に思つて居たものに相違無い、——然し彼は死後日光に小さい堂を建てられて八州の鎮守とならうと希望したといふことは彼の動かせない本意であつた。今日のやうな壯麗無比な殿堂を立て、澤山の巡禮者を吸収しようといふことは彼の希望で無つた。もとより二代將軍が元和二年に造營した御廟は何んなものであつたかは、今日詳細に知ることが出来ない。そして今日の御廟は三代將軍家光が祖父の遺徳を萬代に光澤ならしめんが爲め、前記二千萬圓といふ巨額を投じて造營したものである。

然し如何に殿堂は壯絶麗絶を極めたものでも、家康自身は奥の院で獨り寂しく眠つて居る以上彼の本意は少しも亂さず、又金や赤塗の藝術から魅されて自分の觀賞力の不足を皮肉られるといふ壓迫から自由に逃れても居る。僕はこの奥の院の沈黙と影との小山を愛す

る。今僕は百の大きな老杉が眞直な身體した番兵のやうな敬虔な態度で竝んで居る下、長い高い石の段々を登つて行く、——嗚呼なんたる平氣の空氣！此處で深い沈黙を破る所の聲は、急に叫ぶ水と遙かに聞える讀經の聲とのみである。(讀者は今や夕景に近づいて居ると想像し給へ。)木の間から見える青い空に三ツ四ツ五ツの黒い鴉の影が染抜かれたかと思ふと、瞬間後には早い短い人間の生命のやうに見えなくなつた。僕の足元を眺めると、よち／＼石段を登つて行く一二疋の毛蟲が居るやうだ、——一體貴様はだれだ。考へると我々人間とこの毛蟲との間の相違果して幾程ぞといつたやうな心持にもならざるを得ない。實際それは答へるのに困難な問題かも知れない。

僕は石段の途中で今やあはて、降りて來る外國人の群れに出會つた。僕は家康初めその他の恐ろしい對耶蘇教の態度を不圖考へた、——家康は地下と彼が嫌ひ抜いた西洋人とにこゝ／＼握手して居るであらうと思ふと、其處に深い皮肉があるやうにも感じた。

僕は五月の月に日光へ來たことを喜んだ。自然の美は過ぎゆく春の苦痛と希望の胸からほとばしる美しい太陽との爲めに鋭敏さを露して居る。眞實なる日光の觀賞はこの大自

然の青々して豊饒な莊嚴を見て初めて出立すると僕がいふ意味は、日光の美は殿堂の美であるより寧ろそれ以上に老杉や水の美であるといふ譯である。

見給へ、如何に老いた杉の木の青色が五重の塔の朱と調和して居る工合を——又其他澤山の殿宇が自然の掌の上に如何にも安然と靜かに竝立して居る様子を——然し諸君にして東照宮御廟には多少騒々しい藝術的混亂なることを認めて、更に一層殿堂と自然との融和を見たいと希望するならば、諸君は須らく東照宮御殿を辭して三代將軍即ち大猷院御廟へ行き給へ。其處へ行くと莊嚴が靜寂と抱合して、なんたる女性美の温かい空氣が漲つて居るであらう。

まづ諸君は下の軸部が眞赤でその上に眞黒な斗拱のある二天門の前に立つて、ずつと下の方に見える水屋（この小建築位簡單精巧な手法から出來たものはあるまい）を望むと、必ずや詩の靈が輝く日光に乗つて飛んで居る事を感じるであらう。又その日光は五月の青葉に映じて青びかりして居る印象を受けるであらう。

其時には、だれでも『あらたふと青葉若葉の日の光』とか吟じたかの芭蕉のやうに、五

月の青い自然に對する熱烈な嘆美者たらざるを得まい。二天門を這入つて石段を上ると夜叉門で、この門の柱には彫刻された模様が彩色してある。評者に語らせると、東照宮に於ける高肉の盛上げ彩色の試みが寧ろ失敗に終つたので此處ではその覆轍を踏まぬ用意のほども察せられるといふことである。夜叉門から眞直に歩むと唐門に到着する。建築の専門家に聞くと、この門の下の壁面の手法は面白く殊にその虹梁の形は獨創的で唐破的に由て居るのも嶄新である、又門の兩脇に袖が附いて居る意匠も注意すべきであるさうだ。それから全部佛式に則つた大猷院の拜殿に到着するのである。參拜者は堂内の裝飾として天蓋や禮盤や經机や華蔓や香爐や燭臺など悉く佛具が竝んで居ることを直ぐ注意するであらう、又堂内の長押の表面は凹凸の刻り形が水平に施されて居るが、これなどは如何に破天荒な長押であるかを味ふべきであらう。そして又石の門の格天井も見のがしてはならぬ。大猷廟の奥の院へ歩を向けると其處に皇嘉門がある。この建築法は所謂龍宮造で支那佛教趣味にあやかつたものであることはいふまでも無い。

諸君がこの大猷院御廟を辭して二天門を降り是非共水屋の方から再び御廟の方を見上げ

給へ——諸君は僕と同様に、きつと繪に描いた龍宮の樓閣が夢のやうに空氣に乗つて眼前に顯はれたと感ずるであらう。

僕はこの水屋を去つて大猷院御廟の境内を後にする時、東の方宇都宮街道は大澤驛に至る、壬生街道は文挾驛に至る、西の方は足尾竝に久我村に至り、乾の方は栗山郷、それから中禪寺奥湯元を経て上野國境に至る、北は會津領山谷塚に至る、又南の方は足尾に至るといふ日光山法親王の御神領一萬三千石の直轄地は舊時代に於て、所謂不殺生不伐木不開拓の三事が嚴重に勵行されて居つたことを胸に浮べた。そして僕はそのお蔭で日光が今まで完全に存在して來たことに對して深い感謝を表すべきだと考へた。

所で日光御廟ばかりで無く日光山全體の保存は、將來に於ける日本國の大問題であると云はねばなるまい。

萬葉論

どんな國でも曙光時代の文學は天然自發の聲である。若し藝術的創造といふ言葉を使ふことが出来るならば、その時代の想像は成形的に顯はれて居る、塑像的に顯はれて居る。その後の文學のやうに平面的で無い。暗黒を破つて東から太陽が上る——そこに新鮮な驚異の現象がある。如何に太陽が天へ上つて西へと進んでも、再び朝の光輝ある表現を繰返すことは出来ない。自然の冬眠は春の最初の接吻で破れて一輪の梅が咲く——そこに新鮮な驚異の現象がある。如何に梅花がその後數千となく咲いても、再び最初の一輪が表現する奇蹟を繰返すことは出来ない。曙光時代の文學は、特種な人間の心が如何に發展するかをの徑路を語りまた暗示するものでないから價值がある、言ひ替へると、曙光時代の文學は始めて目覺める國民性の叫聲であるから價值がある。曙光時代の文學は所謂文學的批評を超越して居る。即ち英雄的心境に反動する想像の産物である。一あつて二あるべきもので

無い。所謂進んだ時代の文學より古い過去の文學が、遙に輝いて見え尊く思はれる理由はそこにある。

今人類の進化する徑路を考へて見ると、物理的世界のあらゆる現象と同様に動いてゐることを知る。人間は單純な感情の力を犠牲にして、卓越した建設的知識を得て居る。丁度子供が段々智恵付くに從つて所謂動物心が薄らいで行くやうなものだ。有機體生物の下等な階級を見ると、生命の創造的分子が取分け傑出して居るのを知るであらう。國の文學の上でも、生命の原始性を犠牲にして所謂進歩の階級を上つて行くのである。さうして、眞實な想像の力が最も力強く動く時は、特別な個人的天才の出現よりは國民全體の心境を表現する場合である。この意味において私は日本の萬葉時代を價值づけ、それに相應する尊敬を拂ふものである。

ギリシヤにしてもホーマーをその後の如何なる文學者にも比較することが出来ないやうに、萬葉時代の人麿をその後日本における如何なる文學者に比較することが出来ない、後世の人を萬葉時代の作者に比較すると一寸法師の感がある。文學的にいはゆる進んだ藝術

は後世の作品に求めなければならないことは無論だが、それは純白な自然の響を缺いて居る。萬葉時代といつても、日本の神話を遠く離れて、人を驚かすに十分である盛大な文明時代ではあるが、丁度朝の七八時頃のやうなもので、まだく、英雄時代の力と想像を失つて居らない。私は思を萬葉時代にさかのぼらせて、嚴格な意味で曙光時代といへないが、それに近い時代といふことが出来る大化から奈良朝へかけて前後百五十年間を包む光榮に酔ひたいと思ふ。萬葉時代へ歸つて、私の「原始へ行つて力と想像を得よ」といふ主張を立證したいと思ふ。

生命の藝術とは何であるか。現實から産れる想像の表現の外何物でもない。生殖力のある想像は不死に新鮮である。眞實の想像を産出する現實の價値は永遠不朽である。私は萬葉歌人の作品を所謂レース・タイプの幻想として眺める。修養の培養を知らない人間に、何といふ敏感があるであらう。即ち私は萬葉歌人の純白な敏感性に驚くものである。萬葉集を見ると澤山の歌が読み人不知で出て居る。これから推しても、この時代の文學がどんなに失はれて居るであらうかを容易に想像することが出来る、またこの時代が如何に「歌ふ

生氣』で溢れて居つたかを想像することが出来る。西洋で個人的發達の始はギリシヤに起原して居るが、重に東洋の影響でギリシヤ文明は盛大になつた。所で日本の古代文化は、いふまでもなく漢土の文明を受入れてその實質を豊饒にした。奈良朝から平安朝へ進むと、歴史のやうなものも藝術的權威を得、ギリシヤにおけるプラトリーのやうに哲學の根底を据ゑたものはないが、新しい人生の體驗や新しい人生の活動が盛んになつて新時代を作るに至つて居る。その新時代の人——假に紫式部にせよまた清少納言にせよ、人麿時代の過去を思つてその光榮をしのんだことであらう。さうして私も廿世紀の今日から、八世紀の萬葉時代を考へて、この時代の傑出した歌人三名を、近代的藝術觀から批判することにする。それは後世に産れたものゝ特權である。

柿本人麿は古典歌人である。人は今更かういふ必要が無いと思ふであらうが、私が彼を古典歌人であるといふ理由は、彼が遠い昔の持統文武兩朝の人であつたといふ外面的事實

にあるので無い。詩歌の上で「古典的」といふ眞實の意味は、感情や意見の一時的流行をはるかに超絶して居ることで、所謂上下三千載を通じて人麿の如く文學的榮枯盛衰を受けて居らない歌人は無い。彼が一あつて二の無い古典歌人である所以は外で無い。ロマン・タイプともいふことが出来る抽象的な彼の想像が纏綿としたラテン式の感情と融和して、雄渾雅正な格調を作つて居るからである。彼は多涙多恨の感情を山川の上に、風物の上に羈旅戀愛の上に、特に衰死の上に投げて居るけれども、彼が單に感傷歌人で終らなかつた理由は、彼に抽象的想像があつたからである。萬葉第一巻に出て居る吉野宮の歌を見よ、高市の皇子殯宮の歌を見よ、あるひは近江荒都を過ぐるの歌を見よ。天地山川は天孫降臨後に我が大君への奉仕として顯はれたといふやうな哲學が、森嚴莊重な祝詞の言葉で表現されて居る爲めに、彼の作品に時代を超絶する神話的暗示がある。「曙光の門」で響く英雄史談的暗示がある。人麿に對する在來の批評は、彼の格調が祝詞を入れたといふ點を力説して居るが、私はこの點をもつと深く心理的に了解する必要があると思ふ。彼は祝詞を歌に入れたから偉い、彼は至誠の人であつたから偉いと簡單にいつて退ける問題で無い。臆

論を彼の宇宙観まで進めないと、彼を眞實に了解したものはいへない。

今人麿を歌人としてその作品上から見ると、その他世界の古典詩人と同様で、彼が取扱つた材料の方が表現の手法の方より劣つて居る、彼は貧しい材料で立派な詩の成績を上げて居る。古いギリシヤの叙事詩もさうであるが、歌人として人麿の興味は壯麗な言葉の詳述の上に懸つて居る。彼は偉大な言語の鑑賞家であるといはねばならない。彼の使用した言葉は、支那文學の刺激で在來の祝詞を一層豊富にしたもので、嚴格な意味からいふと、彼自身の力で創造したもので無いであらう。しかし彼は選ばれた文字の歌人で、所謂金繡の文字の所有者で、色彩のある彼の一行々々を撃つと、蒼空にも響く金石の聲がするやうに感ずる。彼は莊重雄渾な一行々々をユニットとして一篇の長歌を作つた詩人で、彼の細心な忍耐と技巧上の熟練は珍しい寶石工人に比較することが出来る。『大御身に大刀とりおぼし、大御手に弓とりもたし』で始まる『高市皇子の殯宮の歌』百四十九句を見よ、彼獨特の『評述の筆法』は全く日本歌壇の驚異でなくて何であらう。

外國の詩人中で人麿に類似する人を求めるならば、私は第一としてミルトンを想起する

であらう。ミルトンも人麿も等しく個人的趣味性で格調の森嚴を破らさせなかつた人である。彼等は詩歌の本質をどう信じたかといふに、詩歌は現實的であるより抽象的で無ければならない、想像的であるより原始的であらねばならないと信じたであらう。彼等の信ずる詩歌は個性の花から個性の花へと飛ぶ胡蝶で無い、抽象の雲と抽象の雲との間を流れる白い大きな雲である。

天地開闢のそもぐの最初を想像して見よ——如何に自由な素朴な聲を山川草木が天空に向つて發したことであらう、如何に莊嚴な沈黙を日月星辰が守つたことであらう。神話時代を遠く離れない奈良朝時代はまだ原始的な力を失つて居らない。その絶對力は變幻自在な自然の原理を肯定した。その激烈な感情は個性的官能としてコンクリートになつて居らない。この時代に人麿は、強制的に迫つて來る先天的な日本人の生氣を歌の言葉で盛つたのである、彼を通じて發する自然の聲には選擇がある。整理がある。即ち人麿は自然の聲を創造し直したのである。彼はそれを藝術化したのである。彼は現實を理想化したともいへる。彼は實感の上に神話的世界を作つた。

人麿は狹岑島の素性も知れない死人を悲んで、「玉藻よし讃岐の國は國からか見れどあかね」の文字で始まる長歌を書いて居る、さうして後世の批評家から、これは無意味に壯大な言葉をつまらない題目の上に浪費したものだといはれて居る。私自身はさう思はない。私は人麿の思想に立入つて考へて見たい。人間は神の創造として最も大で最も神秘的なものであることはいふまでもない。宇宙の現象は人間を中心として動き變り、人間は磁石であつて有らゆる現象の光を集める。存在の理由から見ると、名の無い人間でも高貴な人と何の相違を知らない。山川草木の現象に階級の區別が無いやうに人間社會にそれが有る理由が無い。人麿が高市皇子を歌つたと同様に莊嚴な數千言を無名の死人に陳ねた時、私は彼の廣い思想に觸れるのである。彼は愛國的至誠の人であると同時に、天地と共に亡びない詩の宇宙觀に住んだ。若し彼あつて詩歌を所謂九鼎大呂より重からしめたとする、その點でなくて何であらう、私はこの無名の死人を悲しむ長歌を読んで、彼はその所信を堂々と確立させたのだと思はざるを得ない。この哲學が純潔朴直な彼の言葉の骨となつて飛動して居るこの點で、私は彼を日本歌壇切つての一大巨人とするものである。

彼が道德家であつたことはいふまでもない。彼の色彩ある構圖ある遠近のある言葉の壁畫を見よ。同情のある深い感情が縦横の糸となつて彼の壁畫は織られて居る。勿論道德家として彼の興味の範圍は今日から見ると左程廣い反省的なものでない。彼に特殊な道德觀を期待する人は、持統文武といふ古い時代を無視するものである。しかし私は彼が歌つて居るコンセプション以外に人間道德が有らうとは思はない、彼は避けることが出来ない先天的人間感情の基調の上に立つて居る——私はこの點を尊重するものである。香具山の屍を見て詠める歌を見よ、土形の娘子を火葬する時の歌を見よ、溺死したる出雲の娘子を火葬する時の歌を見よ、あるひは吉備伊采女の死を弔ふ歌を見よ。彼はその何れでも、人生の悲運を道德的に歌つて彼の藝術に一段の卓越を輝かさせて居る。彼は輕薄淺膚な即興的詩歌を、淫蕩で單にセルフ・インダルゼントな歌人を恥づかしめるに十分である。彼が詩歌に沈痛莊重な格調をもたらした功績は、眞に彼を「歌聖」として賞讃する値があると私は信ずる。歌聖といふ言葉は日本では亂用され過ぎて居るが、この言葉を人麿に使つて始めて意義があるといはねばならない。

しからば彼は所謂天才であつたかといふに、私はさう思はない。彼は改新者である。賢明な改新者として彼は卓見家である、遠大な眼を具へた批評家である。實際彼は何物をも歌の上に創造したのでないといふことが出来る。彼の長歌の大部分は今日いふ散文で顯はれても、彼の目的は十分に果すことが出来ると思はれる。彼は傳統に忠實であつたが、改新者として彼は傳統を立派に生かして居る。私は彼の批評的卓見に敬服するといつた——若し彼にこの卓見が無かつたならば、どうして森嚴莊重な祝詞の式様を復活させることが出来よう。一般的に歌には没交渉であるかのやうに思はれる祝詞を生かして、自分の想像と音律と宇宙觀とを表現した點が偉大でなくて何であらう。人間として彼の卓越性は彼の彼の時代ばかりでなくすべての時代に通ずる大歌人としたのである。彼は改新者ではあつたが、歌人として練習は遂に創造者の力さへ持たせるに至つたのである。さうして彼を後世から先驅者或は開拓者として尊敬させるに至つたのである。

今日から彼を見ると最も偉大な歌の開拓者であるが、彼の時代では彼は熱烈な反抗者として存在したであらう。非常な興味を以て私はこの點を考へて居る。彼の時代は聖德太子

が一生の才徳を傾けて佛教を興隆させた時代である、漢土の文化が決河の勢ひで日本へそゞぎ込んで來た時代である、佛教傳來が伴つて來た支那文化が日本にも百花爛漫の盛況を呈させるに至つた時代である。奈良における都會建築を始めとして造像彫刻、それから文學の上でもまた日常生活の上でも漢土化せざるを得なかつた時代である。眼前に西洋化しつゝある今日の日本を見て居る私は、容易に漢土化する奈良朝時代の心理状態を想像することが出来る。漢土化せるこの時代に一人あつて、彼は國民的詩歌を傳統的に復活させ、文學からその時の人民の歩むべき路を示した。彼はだれでもない。柿本人麿その人である。時代に對する反抗心は彼をして『天孫降臨』を語らざるを得ざらしめた、日本開闢以來の因縁を語らざるを得ざらしめた。近江の荒都を過ぎし時の歌を讀め、吉野の宮を詠じて富岳の御遊を歌ひ祝意を述べた人麿の長歌を讀め、それ等の文字が日本主義確立の大宣傳で無くて何であらう。彼は愛國家であつた。彼はそれ以上に豫言者であつた。彼の言葉は、自分を忘れて外國化するものに對する熱烈な挑戰狀であつた。彼の言葉は、漢土文化を否定する宣言で無くて何であらう。彼も彼の時代が産んだ偉大な偶然の出現であるといへる。

彼の血に流れるローヤル・ブラッドは彼を最大な古典的國民詩人とならしめた。古典詩人として彼は平凡の信者である。彼は感情の上で平凡である、道徳の上で平凡である、哲學の上で平凡である、愛國の上で平凡である、文學の上で平凡である。しかし平凡の偉人として時の流行以外に立ち、日本主義の歩むべき大きな路を永久に私共に教へるであらう、さうして如何なる時代を通じても彼は日本を飾るであらう。

今人麿を去つて山部赤人へ移ると、雄大な山の絶頂を下りて、靜謐平和な空氣が森林を包む山奥に入るの感がある。後者に前者の莊嚴はないが、私は親み易くしてしかも犯すことが出来ない赤人の風韻を尊重するものである。ギリシヤ藝術に見る斷片的な壺や皿にグランド・スタイルを想像せるある物があるやうに、人麿の示す雄偉の完全は無いが、赤人に歌人として人麿に劣らない價值があることをその作品から知ることが出来る。赤人は人麿のやうな熱烈な感情の所有者でない、また人を動かす前に先づ自ら動くといふ詩の狂人でない。彼は人麿のやうな『生命の力』を時と空間へ散亂させる文學的浪費者でない。彼が好んで住もうとする環境は悠々として迫らない穩和のそれである。彼は柔和の歌人として、

靜かな歩みを運んで自然に接し、自然も喜んで融合的半面を彼に見せるのである。彼はどんな肉體の所有者であつたか知ることが出来ないが、恐らく彼の歌風に相應しいものであつたであらう。彼は人生の町に溢れる騷擾を嫌つて、平和な山川の音楽に耳をそばだてた。理智的にセルフ・インダルゼントな消極的な人で、彼は歌人として完全に近いデレツタントである。『和歌浦に潮みちくれば潟をなみあし邊をさして鶴鳴き渡る』と歌ふ彼は、『明日よりは春菜摘まむと標し野に昨日も今日も雪はふりつ』と歌ふ彼は、『古の舊き堤は年ふるみ池のみぎはに水草生ひにけり』と歌ふ彼は、濕氣が多くて不活潑な日本の田園空氣のなかに自分を忘却して居る消息を傳へるに十分であるであらう。彼は人麿のやうに赤く燃える噴火山の火焰で無い。彼は赤い火焰と赤い火焰との中間の時に、噴火山から細く靜かに天を指して上る一條の白煙である。

『一條の白煙』といふ言葉は彼を評し得たりと私は思ふ。感激が靜止した場合の歌人が即ち山部赤人である。若し私が彼を消極的といつても、それは人麿のやうな積極的な人より價值の上で劣つて居るといふ意味で無い。人麿がライフ・プリンシプルで積極を代表する

なれば、赤人はその消極を引受けて居るのみである。活動その物が尊いと同様に、静止も捨てがたい親みがある。赤人あつて人鷹の輪廓が明瞭に成るといつたやうな譯で、萬葉時代の一幅對である。今赤人を世界へ持出したとすると、彼は少くも詩の價値をトーマス・グレーと争ふことが出来るであらう。グレーは少數の作品で詩人としての名聲を不朽ならしめて居る。

實際彼の名聲は田舎寺院の墓を歌つたエレジー一篇にかゝつて居る。英將ウルフがクエベックかどこかで戦死せんとした時、戦場の名譽よりこの一篇の作者となりたかつたとか語つたといふ一挿話がこのエレジーについて居る。所で私は、永い日本の歴史中でどの大將が、戦場の勇者となるより山部赤人となつて富士の秀靈を歎美したかつたといつたことがあるかを知らないが、『わたる日の陰もかくろひ、照る月の光も見えず、白雲のいゆきはどかり、時じくぞ雪は降りける』と歌つて、『田兒の浦ゆうち出て見れば眞白くぞ不士の高嶺に雪はふりける』の反歌を持つ簡単な叙景の一篇は、日本が存在しない時が來ても、日本語が亡びない限り不死の作品として傳へられるであらう。幾千年の長日月の間でこれ以

上の詩歌を富士山に書くことが出来ないといふにおいては、日本人の詩才を疑はねばならないかも知れぬが、實際富士に對する讚美渴仰の言葉としては赤人で盡きて居る。

赤人の作品には感情の上でもまた思想の上でも何等の無理がない。極めて自然である。私はこの點をどんなに愉快に思ふか知れない。赤人といふ人は、一個の人間としても作品に現はれてゐるやうに無理のない普通人であつたであらう。他を驚かせようなどとする人でなく極めて人情的の人であつたであらう。今日の言葉でいふと、彼は、温良な紳士で、靜な微笑の満足をもらしながら人生のページをゆう／＼と繰つて行く詩人である。彼は徒に感情を制限しようとしなない、またどんな場合でも、感激的行爲を價値するものと思はなかつたであらう。彼は人鷹の長歌を読むことがあるとすると、『これはまた煩すぎる歌だ』といつて途中で捨てたかも知れない。赤人は靜に流れる谷川の水にたとへられる。時には岩石に遇つて激動することが谷川にないとも限らない、しかしその谷川は直に自個本來の靜さを取返すことであらうと思はれる。私は靜寂な詞藻の人として赤人を尊敬する。

彼は叙景の和歌の開拓者として、人生自然の傍觀者である。彼の作品中最も雄大なもの

と評されてゐる富士山の長歌にしても、彼は平靜な格調に立つ詩歌の雰圍氣を忘れたものでない。彼位自分の本領を了解する歌人はない。一見自個を面接する情景の中に没却するやうに思はれるが、彼は一旦失つた自個を直ぐ再び發見して居る感がある。彼は自然と融合して居りながら、決して自分を失つて居らない——この點が彼の偉大な所だ。彼は不安で騷擾な世界へ踏込まない、平和な隱密と善良な趣味に生き、人を疲勞させない和合的な空氣を呼吸して一生を終つたに相違ない。自然や人生に對して傍觀者としてこの態度は、眞實な日本人が詩歌においての態度ではあるまいか。日本主義を高唱した人麿が後世の日本人に『遠隔の感』を與へて居るけれども、眞實な日本人として赤人が後代の歌人とも併人とも直接親密の關係を維持して居るのは主としてこの傍觀的態度に懸つて居る。

人麿でも赤人でも、彼等の作品が即ち彼等の自叙傳だと見るの外はない。單に卑い官位の人々であつたといふことの外、彼等に關して何物も知ることが出来ない。『大人物は短い傳記を持つ』といふ言葉があるが、それにしても余りに短かすぎる。所で、極めて短い傳記の人麿と赤人に比較すると、長い傳記を持つて居る萬葉歌人は大伴家持である、所謂波

瀾に富んで居る。また彼が實演した政治的變化に連れて、彼に文學的變化があつて、私どもにも興味を與へる。壯年時代における家持は、人麿や赤人に對する反逆者として顯はれてゐる。絶對的な詩境に立ち、全部の表現として歌の道を歩きながら靈の統一を計らうとした人麿と赤人に比較すると、家持は官能的に動いて、人生を變化の上から眺めて居る。また官能の奴隸となることさへ辭しなかつた程、家持は感傷歌人である。官能的詩人は文字を遊戯視する、即ち家持は歌を自分の氣まぐれな戀愛に對する一背景と取扱つて居る。越中へ赴任前における彼はいはゆる風流才子で、氣輕な胡蝶のやうに一人の女から一人の女へと飛移つて、戀愛の花粉を散布して歩いた。従妹で彼の妻となつた大伴坂上ノ大嬢に『吾妹子が形見の衣下に来て直に逢ふまではわれ脱がめやも』など歌つて居る。しかし、それと同時に『うづらなくふりにし里ゆ思へどもなにぞも妹に逢ふよしもなき』と紀ノ采女に送つた彼は、『夜晝といふ別知らにわが戀ふるころはけだし夢にみえきや』となにかいふ娘子に送つた彼は、實に後年の在五中將に何の選む所が無い。人麿や赤人は人生を嚴肅に考へて、原始的な合一の境地に入る唯一手法を歌に發見しようとした態度に比較すると、

家持の輕薄華美な態度は低級な感傷主義だといはねばならない。奈良朝時代も末期になつて頹廢氣分が流れて、四季折々の景に添へて戀愛を偶するのが一般の風流事となつて居つたであらうが、家持の壯年時代における態度は、後から来る平安朝の淫靡時代を既に暗示して居るといふことが出来る。産れながらの愛人として、家持は歌のノートを持つて居つたことを認めねばならないが、それを餘り輕薄に取扱つたので彼の壯年時代の作品には眞實の現實味が無い。「人麿赤人が苦心慘愴刻苦經營の餘になりて漸く九仞の功につかんとした和歌の地位をして一期に失墮互解せしめた」と語る批評家もあるやうに、私も家持が歌を戀愛の一道具と使つたことを遺憾とする。また後年になつて實證された如く、和歌が戀愛の一道具として適當な文字の形式であるといふ點は、更に深く研究する餘地があると思はれる。家持が中年以後になつて變化する所がなかつたならば、彼は確に萬葉時代の顔に泥を塗つたものだといふことが出来る。然し晩年に大成した彼は、壯年時代の行爲を償つて居るともいふことが出来る。

越中守となつて遠く都を離れた六年間の生活は彼を全く一變させて居る。彼は青春の夢

で彩色した戀愛を、僻地で吹きすさぶ寒い風の中に捨てねばならなかつたであらう。越中の山川は都會の女の脂粉を知らない。越中を蔽ふ高い空には野獸の響がある。奈良一番の好色男子は郭公を聞き花橋を見ても、相手の女が居らないので彼の感情は動かない。かゝる境地の家持を想像せよ。だれでも憐憫の情を起さざるを得ないであらう。また彼自身にとつては如何にも斷腸の感に堪へなかつたであらう。彼が任地で得た病氣は一層望郷の念を燃やしたが、古書の涉獵といふ安全な隠れ場所で彼はこの遣るせないノスタルジアを慰めようとしたのである。さうして都を遠く離れた越中は俄然、彼の爲めに研究室と一變するに至つたのである。彼は戀愛を失つたと同時に智識を有つた。彼は過ぎゆく青春の影を中年者の微笑で見送つた。研究室の歌人として彼は、人麿や赤人或は憶良や父旅人を想像して、試験的に彼等に相應しい長歌や短歌を作つた。彼が任滿ちて再び奈良へ歸つた時、彼の研究時代は終結して、彼は人生の第三期に入つたのである。

大伴氏は道臣命から出て、金村が大連と成り大化の改新に大臣となつたものや、壬申の亂を平定したものも居る。代々國の政治に樞要な地位を占めて來て、宗廟祖先を尊敬する

といふ日本古來の美風を遵奉して來て居る。然るに藤原氏が漸次勢力を握るに至つて、家持の血族はいよゝゝ壓迫されて、悲憤慷慨の中に失望を葬らねばならなかつた。家持は藤原氏から生まれて危い目に再三遇つて居る。しかし彼の政治的歴史を語るのは私の目的でない。私の興味は家持の歌がどういふ風に變化したかの一點にある。今、戀愛に浮身をやつした貴公子として都を去つた家持は、忠君愛國の烈士として再び都に顯はれたのである。『海ゆかば水づくかばね、山行ば草むすかばね、大君のへにこそ死なめ願みはせじ』と彼が歌つた時、忠君愛國の歌人として家持の仕事は正に悲壯な終を告げたのである。私は家持と萬葉時代の歌の爲めにそれを喜ばざるを得ない。

月瀬の梅を見る

諸君……諸君と私は叫んで何を語らうとするか。私は何も人を驚かすやうなことを語るので無い、私は東京から數百哩も汽車にゆりに揺られて觀梅のため月が瀬へ遣つて來たと語るに過ぎない。然し西洋に居る私の友人は、このことを聞いたならば定めし異様に感じて叫ぶてあらう、『數百哩もかけて梅見だけをした！』私は西洋人と違つた花に對する日本人の態度を考へて満足の笑を洩さざるを得無い。日本人として私に、花禮讚の命脈がまだく盡きて居らないことを喜ばざるを得ない。數百哩は愚か、數千哩でもかけて花を見に行くといふ心持が私にあることを且喜び且誇りたいやうな氣がする。

關西線を伊賀上野で降りて、私は停車場に老木の梅の枝が花瓶にさしてあつて金の短冊に『月瀬の梅』と書いてあるのを見た。私は私の觀梅は此處から始まるだらうかと思つた。私は上野町の愛染院へ行き私の尊敬する芭蕉の墓碑の側に今を盛りと咲いて居る紅梅一株

を見た。それから養虫庵へ立寄り、庭の瓢箪池へ影を寫して居る二三本満開の梅の木の下に立つた。私は私の月が瀬の觀梅は此處から始まるだらうかと思つた。いな否、私の觀梅はまだ始らない。

私は一人稱でこの文を書きはじめたが、私は獨りで此處へ來たので無い。私に四人の同行者があつて、この中の二人は私の兄で高木眞藤と芝公園通元院の住職、その他の二人は私の妹種子と私の子供正雄、他人の交らない所謂水入らずの一行である。私共の一行は今一臺の自動車に乗つて尾山といふ場所をさして走つて居る。道は田舎にしては驚くほど立派なもので、右や左に低い谷間の水田を眺め時には見事な松林の間を通つて蜿つて居る。目的無しに走つて居るとしても愉快なドライブで、米國加州の田舎でも走つてゐるやうな心持がした。私が私の脇に坐つて居る妹を見ると、最早や五十歳に手の届くいゝ加減の婆さんだ、高木はもとより私も今年満五十だ、然しかういふ風に兄弟揃つて旅行するのは今回が臍の緒きつて始めてだと考へると、私は感傷的氣分に襲はれざるを得無い。平和な心の満足よりは、『人生老い易い』の感が深い。齋藤拙堂が始めて此地を訪問した當時には、

上野町を一里半も離れた白樫石打の谷間に梅の木が澤山有つて、言葉通り『漸入佳境』の有様であつたさうだが、今日では稀に残つて居る路傍の梅の木が昔を想像させるに止まつて居る。この様子では私共の觀梅は急に始まりさうに無い。私は自動車に揺られて心持の良い夢心地の間に、月が瀬とは違つた方角へ連れて行かれるのではないかなどと思つて居ると、運轉士は自動車から飛降りて、『尾山へ着きました』と叫んだ。この尾山は、案内記に依ると月瀬觀梅の關門とあるが果してさうであらうか。

流行らない山間の温泉場でも想像させるやうな茶店が道の兩側にあつて、梅に因んだ土産物を賣つて居る。私共はその一軒の店頭に並べてある椀臺に腰を下した。觀梅もしない中から土産物でも無いと思つたが、店の主婦が滑かに操る雄辯に釣込まれて荷物にならない程度のもを私共は買つた。一體この邊の人は良く喋る、ぎこちない粗野な音調を貫く一種のリズムが愉快に耳へ響く……これが伊賀辯とか大和辯とでもいふのであらう。昔の芭蕉も若い時代にかういふ言葉使ひの人であつたであらうと思ふと、私はこの言葉に懐し味を感じた。私の子供正雄は梅の彫つてある竹のステッキを買つて出發の用意をして居る、

私は月潮案内を開けて、「兩山相燈りて一溪明かなり路断えて遊人渡を呼びて行く、水は梅花と隙地を争ひ倒まに萬玉を涵して影斜横」とある山陽の詩を読んで見る、然しだ……私共が數百哩をかけて見に来た月が瀨は手近かにあらうとは思へない、私共の觀梅はとんと始まりさうに無い。「早く「和門の香世界を觀るに非ずんば人生何ぞ梅花を説くべけん」の光景を見せて貰いたい」と心の中で呟いて居ると、私共が約束した案内人が遣つて來た。この男の懷の中から和装で黄裝表紙の書物がはみ出して居る。見ると齋藤拙堂の「月潮記勝」だ……あは、觀梅の幕はいよゝゝ開く、私共の梅見物はこの案内人の懷の中から始まるといふ次第である。

さあそろ／＼出掛けようとおつて、茶居の無くなる突當から右手の急な坂を上つて、三町ばかりも右し左しして跡の二股になつて居る所に立つてゐると、あら不思議や、風が持ち來る梅花の香氣に觸れて私はぎよつと驚いた。何處からこの香氣が來るか……天から降るか地から湧くか。案内人の後に従つて左手へ半町も入ると、私共は今崖の鼻先に立つて居る。まるで豫期しない所から自然の變化が展開し始め、山や川の卷物が足元から擴がり

出したので私は驚異の感に打たれた。眼前の崖下には、數はさう澤山でないが見事な梅の木が並んで白雲を棚引かせて居る。さうして遙の下を川巾の廣い水が青く流れて居る。眼を上げて遠望すると、其處に伊勢伊賀大和の三國の連山が蜿つて居る。近い山の濃藍色は遠い山の鼠色と麗はしい對照をして、崖の上に立つて居る私の心に鮮新な氣分を吹きこむ。こゝは案内人が「一目八景」と呼ぶ場所で、南方の川向ふの大瀬里、北西の谷にある唐竹藪、南方の北谷なる菖蒲谷、私共の今立つて居る所即ち眞福寺の崖下別名帆浦、私共の直下の西にある老間里と老間瀨、帆浦の右にある鹿飛と眞福寺の祝谷が八景ださうだが、一々説明されても私の興味を唆らない。名稱癖に捕はれて狭い範圍を種々區別付ける昔の人の趣味性は私に了解されないことは無い、又實際にこの月が瀨の勝地である尾山八谷の抒情詩は、前記の八景が細目條款となつて一篇をなして居るであらうが、今日では拙堂時代と違つて風景が破壊されて仕舞つて居らう。それに近代人としての私の心理状態は自然の外貌に對してもその細目に留意するには大まか過ぎる。私の子供が「なんだこればかりの梅の木か」と叫ぶと、案内人は責任のある辯護士のやうな顔付きで、昔は此邊梅花ならざる

は無しであつたと語つた。然し私自身としては數百哩を旅して始めて嗅いた香氣の一息だけで澤山だ、この山川を前にして眺める百本に足らない梅の木で十分だ。これから奥へ入つて何程の梅樹があるか知られないが、靜に奏する梅の獨吟で私の觀梅が始まつたことを喜んだ。

『一目八景』を辭して右へ廻り急な坂を上がると直ぐ眞言宗の眞福寺といふ寺の地内だ。この寺へ夜更けてから拙堂が遣つて來て月下の梅を眺めたことが月潮記勝に書いてある。その文を抜くとかうある、『月色清朗歩抵眞福寺。枝枝帶月、玲瓏透徹、影盡橫斜、實細玉釵、錯諾滿地、水流其下、鏘然有聲、覺非人境。徇岸西行、前壁月瀨。水清如寒玉、漾月影、作銀鱗、而兩山之花倒蘸其上、隱約可見。一掉中流山水俱動。吾平生之願足至酬矣。』假令今日月の夜この寺を訪れても拙堂の感激は得られ無い。第一に梅の木が無い、又水もその下を流れて居らない。然し箒目綺麗に掃き清められた境内の白い砂の上に午後三時の太陽は落ちて、靜謐の氣分がなみくと溢れて居ると私は感じた。庫裏の方へ行つて怒鳴つても留守番一人も出てこない、漢詩人ならば、『僧を尋ねて僧あらず野鴉獨り飛ぶ』とい

つたやうな詩境である。私はこの詩境に立つて、近頃疲れてとんと冴えない私の頭が心の清澄を取返し、頭の隅から隅まで芥が掃出されて仕舞つたやうに感じた。これは純東洋式の一光景である、正しく『空虚の王國』である。西洋では自然でも人事でも量其物が自分を満たすことを勉めて、神様の音楽を箇性の濁音で破壊しようとする。然るに東洋の空虚の王國には、沈黙が思想の上を流れて居るのだ。私が眼前に見る山間の一孤寺はこの空虚の王國に建つ一表象である、私は此處に立つて、整頓された靜肅な雰圍氣を呼吸することが出来たと喜んだ。私はかういふ場所こそ晩年の芭蕉が好んだであらうと思つた。又私の知つて居る人の間ではさし向け森田恒友君が好きさうな場所だとも思つた。森田君がかういふ場所の繪を描くとすると、君は一疋の犬を入れるであらうとも思つて微笑した。

私共は今寺を出て左へと路を取つて歩いて居る。行こと五六十歩ばかりすると三學院へ着く、こゝは案内記に依ると、天保時代の某年二月十八日に拙堂星嚴夫婦並に服部竹塙や福田半香の一行が觀梅の爲め滞在したさうな山伏の家である。入場料を取つて書畫を展覽して居るので、入つて見たが何一つ私の興味を引くものを觀ない。前記の諸士はその當時

に於ける價值は兎も角として今日の私共とは無交渉である。展覽されてある書畫の中で篠崎小竹の詩に書いてある『都人をして漫りに來り賞せしむること莫れ、恐らくは淳撲なる好山川を傷けん』の文字が私の氣に入つた。如何にもこの詩の通りだ。天下の勝を發見することは由來文人の名譽の仕事となつて居るが、宣傳が利き過ぎると其結果は面白く無い。今日の批評眼で拙堂の『月瀬記勝』を讀んでみると、喜んで現實に即する私共とは縁の遠い漢字で書いた美文に過ぎない。昔のやうにこべくり付いてゐる誇張癖が無意味な文字の圖案を見せるのみだ。この景を見てこの記述を讀むと所々『よく書いてある』と感ずるけれども、美文としても第一流のものではあるまい。

三學院を出て路を右に取り、左のなだらかな細い道を行くと天神の森を飾る女松の幹が傾きかけた太陽に照らされて見事に赤い。此處を過ぎると大谷の上へ出て、道はこれから上り坂で險阻だ。五歩を進めて一曲する、十歩行くと一折するといつた工合で、案内人は此邊を『九折』と呼んで居ると語る。大觀阪の半腹に玉界亭といへば名は立派だが至つて粗末な休憩所が作つてある。私共はこゝで疲れた足を休み乍ら崖下のすつと下を流れる瀧

瀧川を見下す。期節になると瀧川が川の兩岸に咲いて綺麗な影を水に投げるから其名があるといふことだ。それから眼を右の方へ廻すとお約束の梅林『一目千本』が待つて居るといふ段取になるのだが、私共は一週間も早く此處へ來たので梅樹の大部分はまだ咲いて居らないのを遺憾とした。名は千本でも今日存在する梅樹の数は多寡の知れたものだが、満開の時に山上から梅林を眺めたならば、白雲が山腹に憩ふとでも形容したくなるであらう。

私共日本人は古い時代から梅を愛して來たものだ。梅花を歎美するといふ日本人の心理には昔も今も變らない。何故に私共は梅をさう珍重するのであるか。私はしばしば西洋人から、日本人はどういふ花の美を梅に發見して居るのだと質問されたことがある。西洋人には梅に對する日本人の趣味は分らないのであらう。實際に花として梅は櫻花に劣つて居らう、又桃の花にも劣つて居らう。五月の燃えるやうな躑躅は梅以上に見事であらう。秋の菊花の美に對して梅は競争することが出來まい。それでも私共は梅花を第一に推して愛着し歎美して居る。もとより私共の祖先が梅花の趣味を支那人から教へられたものが血に染みこんで、自然に避けることが出來ない一種の傳統を作つたのでもあらうが、私共には

理由があつて梅花を愛して居るやうな氣もする。然らば其理由は何だ。

長くて寒い冬を破る梅一輪に嚴肅な先驅者の希望が輝く。一陽來復を報ずる梅花の微笑はこれ豫言者ジェレミアかジョン・バプチストの微笑である。雪と風とを恐れずに頭を上げて存在の第一聲を發する梅花に敢爲の精神がある。少くもさう想像する時に私共は愉快な麗はしい譬喩を梅の上に組立てる。量の點から見ると梅には人を驚かさせる何等の富も無い。至つて貧弱な花である、簡単な花である。私共の祖先は清貧な高士に梅を譬へて初歩の表象主義を樂んだ。所で、私は内面的考索から一步を進めて詩でかう歌つて居る。

「梅は形體の美を犠牲にして香氣を得た、

花として梅は進化の極點に達して居る……………」

力の節約から得る充實を完全に表象して居る。

昔菅原道眞が梅を歎美したやうに、

私は梅の前に尊敬を捧げる。

百年前の梅も五百年前の梅も

乃至は千年前の梅も、

今日の梅とたいした相違が無かつたであらうと思ふと、

如何に徐々と進化が梅の上に動いて居るかを驚かさざるを得ない。

私の魂も梅と同様だ……………」

私は幾千年間この地に生きてたか知れやしない。

風に揺れる梅の白い花瓣を見ると、

私の忘れた追憶の幽霊が

永劫の波の上から漣のやうに目覚めるやうに感ずる。」

私が讀者諸君の注意を乞ひたい點は、樹木として梅は最早や進化の極點にあるといふことである。人はそれは君の詩的想像に過ぎないといふかも知れない、又實際に私が自由に構成した空想であらう。然し梅花が放散するやうな香氣は體を犠牲にして始めて持

ち得るものである、又かゝる嚴肅な美は生命の最後の時代に於てのみ表現されるのではあるまいか。梅に對して開かれて居る路は自滅だけがあるのみだ。現に此邊にある梅樹の數は拙堂時代に比較すると恐らく其半數にも及ばないであらう。梅樹の幹や枝にくつついてゐる青い苔を見よ、又禪僧のやうに乾枯びた四肢の枝を見よ、さうしてそれでも春になると、一段の勇氣を出して眞白ろに笑つて見せる快活さを見よ。たれか桃や櫻に對すると同態度で梅に向ふこと出来よう。あゝ何たる寂寞が梅花にあるであらう。寂寞は美が進化の最後に滲みだす寥團氣に外ならない。早春の空を白く染め抜く梅の花に何たる神さびた森嚴があるであらう。この態度は生命あるものが最後に捧げる喜悅の默禱である。人として私も年老いて居る。眼前に眺める梅樹と同様に、物寂しい微笑を湛へて永劫の道を順禮して行くかのやうに感ずる。

私自身は陽氣に笑ふため月が潮に來たのでないが、豫期し無い寂寞をしみぐく感じて一行のものと共に、今「一日千本」の蜿つた坂道を下りて長引への通路へ出ようとして居るのである。此邊を鶯谷といつて鶯の朗かな歌を聞くことが出来るといふことだが、私共の

耳へは今日歌の一節も響いて來ない。これまでは山道ばかり歩いてゐたが、今關川本名張川の側に立ち眼前に山間に不似合な和洋折衷の長い石の橋を眺めぬばならない。私共必ずしも風流韻事の人間でないが、周圍の風景とこの橋とが如何に不調和であることを語らねばならない。勿論この橋の爲め交通の便は得て居るに相違ないが、永久的の橋を作るにしても何とかもつと作りようが有りさうに思はれる。拙堂の時代にはこの橋の上に「月瀬記勝」に書いてある竹陰渡があつて、拙堂をして一詩を詠せしめて居る、「梅邊清絶竹邊幽、卷畫溪頭蕩小舟、風白雲香春兩岸、杳然一掉下中流。」橋の上から右を見ると澤山の修竹が水に臨んで居る光景から、橋の出來ない以前を想像して如何にも漢詩人の情緒を喜ばせる幽境であつたであらうと思はれる。

私共は橋を渡つて角兵衛獅子が笛と太鼓につれて舞つて居るのを見た。私は「なるほど春がこの山國へ遣つて來るのは三月も後れる」と思つた。笛の音律はあたりの山に響き、でん／＼と鳴る太鼓は川に轉る岩石に反應する……如何にも長閑な一幅の繪畫だ。角兵衛獅子の連中がみな行儀正しく袴を付けて居るのを見ると、私は角兵衛獅子を此處では單に

遊戯視しては居らないとも想像した。梅は神の愛する樹木であるとする、角兵衛獅子も神前に捧げる年中行事の一といふことも出来やうなどと思ひ乍ら、私は一行の後に従つて疲れた足を引きづり、平坦な道を歩いて間もなく左の坂道を上る。道は梅林の中を蜿蜒して居て、案内記に依ると『仰望暗然行く人宛然白雲に駕するが如し』とあるが、前に書いたやうに満開には一週間も早いので咲いた木よりも咲かない木の方が多いい位である。私共は満開の時に来なかつたことを遺憾に思つた。又芭蕉の句にあるやうに、『春もやゝ景色とふ月と梅』の實景に接しないことを遺憾に思つた。この芭蕉の句が苔蒸した自然石に刻んで『一目萬本』といふ場所の手間の狭い廣場に立てゝあるが、この石碑は幾百とある芭蕉の句塚の中でも一番所を得て居ると私は思つた。一目萬本から下の方を眺めると一面の梅林が眼前に擴がつて居る。此處は所謂月瀨村と稱せられる所で、一目萬本臺から西南に道を取つて上ると左手に見事な竹林がある。私は竹を愛する。若し此處に竹林が無かつたらどんなに月が瀨の自然美を乏しくしたであらう。竹林と共に松が自然美を助けて居る。拙堂も『梅爲之經而松爲之緯水竹點綴之』と書いて居る。如何にもその通りで、月が瀨の

自然美はこの言葉で盡きて居る。

私はいつも所謂名所と云はれる場所へ行つてその實境以上に麗しい名前がやゝこしく附いて居るのを遺憾としてゐる。實境の方が名前に負けて居るのを見ていつも不愉快な感じを持つてゐる。この月が瀨でも其點では、其他澤山ある名所と同様である。誰が名付け親だか知らないが、思ひ切つて美麗な名前が粗末な宿屋に附いて居る。聽泉亭とか浴花亭とか或は騎鶴樓或は香雲亭、悉く實際以上も以上であるから恐れ入る。『一目千本』でやゝ大袈裟過ぎると思つてゐるのに、前記の一目萬本臺といふその上を越す名前もあつて、何處まで誇張したならば満足するであらうかと驚かざるを得無い。私は其場所の價値を否定するので無く、名前の方が勝ちすぎて居るので、知らず／＼皮肉の微笑を洩したくなるといふのである。

私共の案内人は今私共を一目萬本臺から總見山といふ月瀨第一の高處へと導いて行く。遠望は掛値無しに絶勝な場所だ。水量は少いが下を流れる躑躅川も綺麗に見え、不愉快な月瀨橋もこゝから見ると風趣無しとはいへない。拙堂の言葉を借ると、眼界豁然として豁

山呈露し藏匿するもの無しのものである。總見山を西南に下りぐると山を廻つて野田川に添つて出来て居る立派な道へ出て、その道を左へ取つて行くと見事な梅林へ潜りこむ。枝と云はず幹と云はず青苔が一杯附いてゐるのが此處の梅林の特色であるさうだか、奇怪を極めて枝を交へてゐる梅樹の間から向岸に聳へて居る山を眺めると、山の巒に並んでゐる青い樹木が山の肌の大膽な變化を與へる岩石と共に、單調ではあるが魅力ある繪畫の音律を遺憾無く表現して居る。奥の谿といふ所へ來ると梅樹が兩側から道を抱へて、満開の時ならば必ずや雪の墜道を滑るの感を人に與へるに相違無い。

奥の谿から桃香野村へもう直きである。村へ入ると道ばたに由緒有りげな一老梅樹を見る。これが白髭の梅といつて、不思議にも梅であり乍ら桃の香氣を含んでゐるさうで、桃香野といふ名前が出来たものださうな。果してこの梅樹に桃の香氣があるか無いかは知らないが、この邊の梅林は數の上からいつても又木の形から見ても、これまで見て來た梅林以上にたち優つて居る。御維新以來烏梅（主として京都で使用する紅染の原料）の需用が減したに係らず幸にも斧斤の災難を免かれたからだといふことである。

私共はこれで所謂月が瀬の梅溪を巡覽し終つた。時間も追々夕景に近づいて來たので、もと來た道を逆に歩き、前の月瀬村へ歸り其處の旅舎騎鶴樓に入りて一泊することになつた。案内人とは宿屋の入口で分れたが、彼は懷中にして居る月瀬記勝を一度も開けなかつた。それは彼の看板に過ぎないのであらう。拙堂もこゝまで人に利用させるとなると、彼は無益に生きたのでないと私は思つた。

私は騎鶴樓のことを書く必要がない。私共は粗末な木綿の襦袍をあてがはれ、ごきくして體が痛くなるやうな蒲團で寝たといふに過ぎない。床に就く前二階の廊下へ出て外を眺めると、面前の尾山諸谷は濃い墨を塗りつけたやうで皆目判らず、一つ二つと見える電燈の火は天上の星が落ちたのでは無いかと思はれた。期節は春になつてゐても、夜の空氣は私の顔を痛いほど刺した。宿の主人が手垢で汚れた書畫帖を持出して來た。案内記には文人墨容の眞蹟多しと書いてあるが、私の興味を引くものが無かつた。

此處は大和の東北隅、東西に屈曲して居る山を閑雅な谷水が飾つてゐる。尾山長引月が瀬桃香野といふ山間のさゝやかな村が梅林に包まれて、幽靜な自然を人情化してゐる。昔

は前記の諸村落の外に、種梅を業とした場所がこの邊に澤山あつたさうだ。所謂月が瀬の梅の歴史は幾百年前に溯つて居るか知らないが、何んでも五百年前に尾山の天神社境内へ植えたのが最初で、地味に適するといふ事實が手傳つて梅林が榮えて來たものだ。もとより梅花で自然の美景を彩色するといふ目的でなかつたことはいふまでも無い。烏梅とは前に書いた如く染料だが、熟した梅果を燻蒸して色の黒くなるまで乾燥させるのである。以前はこの山中の一大産業であつて、齋藤拙堂の時代には一駄を一石五斗入として、中熟千四百駄上熟二千駄も出し其収入は米百石の價を越えたものであつたさうだ。然るに維新以來この烏梅が廉價な外國の紅粉に壓倒されて、其需用が急に減つたので、村民は折角の勝地を破壊せるほど梅樹を伐り土地を拓かうとしたのであるが、月瀬保勝會といふものが成立して全部の破壊からこの名所を救助した次第である。

その後村民は梅林から相當の収入を得ようと種々計畫したが、有らゆる物價騰貴につれて梅干も隅に置けなくなつたので、今日では如何なる方法で梅の實を賣るよりも其方が收利が多いとなつて居る。一般には此處の梅樹の數は三萬株以上あると云はれるが、實際は

其半數位のものではないかと私は想像する。然しこのまゝにして置くとこの名所も亡びて行く。若い梅樹を植えてもさう急に生長するもので無いが、補充するのはしないに勝るとはいふまでも無い。こゝの維持は單に保勝會や縣廳だけの仕事でない。立派な道路を作つたり「梅の木を保護させよう」の標札を懸るなどの事は第二次的のもので、主要な保護策は他にあらねばなるまい。

私共は翌朝八時頃騎鶴樓を出發して再び一目萬本臺に立ち、腰をそこにある憶梅亭といふ四阿に下した時、私は其地の景色を見直した。私の梅林に對する歎美は昨日より十倍も二十倍も増した。梅はまだ半分も咲いて居るばかりでも、花が朝日を受けて眞白いエナメルやうに光つて居る。周圍の自然は悉く露を帯びて、優雅な姿に一段の生氣を漲らした。其處を下りて梅林を貫いてゐる蜿つた道を行くと、兩側にお椀のやうに綺麗に刈込まれた眞青な茶畑があつて、これがまた何と云へない愉快な光景を呈して居る。躑躅川を距て、向ふに聳へてゐる山は所謂烟雲縹緲顯模糊として一幅の繪畫のやうに私共に迫つて來るのを感じる。山の巒に並んで居る青い樹木はその他の樹木と相應呼し、白い梅林は下の河

水と微笑を交換してゐるやうに感ぜられる。「何地無梅、何郷無山水、唯和州梅溪、花挾山水、而奇山水、得花而麗、爲天下絶勝」と拙堂が言葉で述べて居る。私は第一流の歎美文で無いと貶し乍ら幾度引用して聽入る次第だが、何といつても月が瀨は拙堂の詩文で盡きて居ると云はねばなるまい。

私共は月瀨橋を渡り道を右に取つて所謂新道を歩き歸路につきつゝあるが、暫く行つて後を振り返ると、これがまた堪らないほど閑雅幽靜に見え、私共が昨夜宿つた騎鶴樓も遙か遠方の山の懐から私共を見送つて居る。昨日この月が瀨へ踏込んだ時には、私自身多少失望の感無しではなかつたが、今朝は去るに忍びないといふ情緒に動かされて居る。私は數百哩かけて廻つて來たことを喜ばざるを得なかつた。

新道を歩いて私共は足元の溪流を眺め路傍に今を盛りと咲いてゐる梅の老樹を一種の美術品として觀賞した。溪流には特種に歎美すべき姿が無いやうに思はれるが、青碧の水の色は綺麗だと思つた。七八丁も歩くと私共は昨日自動車を捨てた尾山に着いて、再びこゝから自動車に乗り、十一時伊賀上野の停車場へ着いた。

私共の一行は此處で二つに分れ、一は名古屋へ向ひ他は奈良を指した。私は後者の人となつた。

大正十四年五月十六日印刷
大正十四年五月二十日發行

坐る人間の評論

定價金二圓

版權
所有

著者	野口米次郎
發行者	山本美
印刷者	久保民生

東京市芝區愛宕下町一丁目一番地
東京市芝區南條久間町一丁目一番地

發兌

東京市芝區愛宕下町一丁目一番地

改

造社

電話東京八四〇二番
高輪四九九三番

慶應大學教授
野口米次郎著

先驅者の言葉

四六判並製
定價一圓八十錢
送料十錢六

目次

- 序 (一)苦言 (二)英雄崇拜の提唱 (三)無用の長物 (四)美感の凋落單純性 (五)世界心
 (六)近代生活 (七)隅田川 (八)現在の價值 (九)詩論一 (一〇)詩論二 (一一)詩論三 (一二)詩論四
 タゴール來る (一三)藝術の神秘國 (一四)罹災女禮讚 (一五)東西文藝論 (一六)笑識の涵養 (一七)
 サロヂニ・ナイヅウ (一八)小泉八雲 (一九)ミラー逝いて滿十年

志賀直哉著	雨	上四六判	定價二圓五十錢
志賀直哉著	壽	上四六判	定價二圓五十錢
谷崎潤一郎著	愛すればこそ	上四六判	定價一圓八十錢
里見 禮著	直 輔 の 夢	上四六判	定價二圓八十錢
芥川龍之介著	沙 羅 の 花	上四六判	定價二圓八十錢
山本有三著	嬰 兒 殺 し	上四六判	定價二圓
倉田百三著	超	上四六判	定價二圓二十錢
厨川白村著	近代の愛戀觀	上四六判	定價二圓五十錢
厨川白村著	苦悶の象徴	上四六判	定價二圓八十錢
賀川豊彦著	死線を越えて、上、中、下	上四六判	定價上卷三圓中下卷各二圓八十錢送料各二十錢

中村憲吉著	折口信夫著	島木赤彦著	木下利玄著	古泉千樞著	齋藤茂吉著	長谷川如是閑著	野口米次郎著	中澤臨川著	新村出著
現代代表 自選歌集	現代代表 自選歌集	現代代表 自選歌集	現代代表 自選歌集	現代代表 自選歌集	現代代表 自選歌集	犬・猫・人間	先驅者の言葉	嵐の 前	南蠻更紗
松の芽	海やまのあひだ	十年	立春	川のほとり	朝の螢				
上四六判 製	上四六判 製	上四六判 製	上四六判 製	上四六判 製	上四六判 製	並四六判 製	上四六判 製	上四六判 製	上四六判 製
送料 十一圓 八十錢	送料 十一圓 八十錢	送料 十一圓 八十錢	送料 十一圓 八十錢	送料 十一圓 八十錢	送料 十一圓 八十錢	送料 十一圓 六十錢	送料 十一圓 六十錢	送料 十一圓 六十錢	送料 十二圓 五十錢

527
53

終